
紅と蒼色の幻想 ～時空を越えた戦い～

鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅と蒼色の幻想　く時空を越えた戦いく

【Nコード】

N8647L

【作者名】

鐘

【あらすじ】

剣術をやってる以外　ごく普通の中学生生活を過ごしていた
井上蒼馬　兄との修行を終えて部屋に戻ると自分の部屋に無いはずの鏡が

置いてあった！？　除きこんだ瞬間！鏡の中に入ってしまった！
いきなり現れた女神様から世界を救ってと言われ
アニメ好きの蒼馬がアニメの様な世界を救う物語です！
終わりが見えませんが・・・よろしく願います
どこかの話からアニメやゲームキャラが転移してきたりして・・・。

アニメ好きな蒼馬がアニメの技を使用したり・・・
最初のほうは・・・面白く無いかもです・・・

キャラクター紹介

本作品のキャラクター紹介です

井上蒼馬（主人公）（男） 属性 炎&水

年齢 14歳 誕生日 4月19日 171cm

私立飛迎煌法大附属中学二年生

武器 長刀 紅蒼閃刀 短刀 狼蒼疾風

好きなもの 刀 アニメ

嫌いなもの 辞書 めんどくさい人

趣味 アニメ鑑賞

解説

マイペースで激情家 心の中でツツコミが得意

紅桜蒼天流 九代目当主 剣術が得意

兄貴と二人暮らしで両親は蒼馬が幼いころに旅で出て行方不明

あまり人とは接しないが人のピンチには、すぐ駆けつける

覚醒すると髪の毛と瞳の色が紅色になる

パートナーは空馬

空馬 属性 風

魔力生命体（女）

年齢 不明 誕生日 不明 154cm

武器 「輝きを持つ変化結晶体」
クリスタルランス

好きなもの 可愛い動物 宝石

嫌いなもの 昆虫 悪い人

解説

お調子者だが腕は確か 覚醒合体能力 治癒能力 転移能力ができる

髪の毛は黄色 瞳は緑っぱい黒！？

キャラクター紹介（後書き）

作者 「今回はメインキャラクター二人の紹介でした」

蒼馬 「他に何人程キャラいるんだ？」

作者 「まだ最後まで考えてないから・・・分らない・・・^^;」

蒼馬 「読者さんに気に入ってもらえるような小説作り頑張れよ」

作者 「はい！頑張ります」

蒼馬 「おっと！そろそろアニメの時間だ！」

作者 「では次回から本編に突入しますので」

作者 「まだルピ？とかそんな感じの使い方もよく分からず・・・」

作者 「小説投稿も初めてですが・・・」

作者 「いい作品作れるように頑張ります 次回もよろしくです」

第一話 時の始まり

「グハア！・・・ウギヤ！・・・ガハア！」

「おいおい！それでも紅桜蒼天流・九代目当主か？蒼馬！？」

「なあ！兄さんよ！なんで俺が紅桜蒼天流・九代目当主なんだ？別に他の人がやつても良かっただろ？」

（紅桜蒼天流・九代目当主になってしまった不幸の蒼馬こと・井上蒼馬・・・なんで剣術やらなきゃいけないんだ？）

「そりゃ！お前だからだろ？」

（意味分らないよ！なんで俺だからなんだ？）

「あ！まったく意味が理解できないのですが・・・なんで俺だから九代目なんですか？」

「それ以上無駄口たたくなら・・・フフフ^^」

「すいませんでした！！紅桜蒼天流・九代目当主！井上蒼馬これから日々精進して頑張ります！！」

剣術も言葉も弱い蒼馬・・・時刻は7時・・・修行終了の時間だ

（そろそろ修行終了の時間か！やっと終われるぜ）

「兄貴！そろそろ終わりの時間だぜ」

「何を言ってるんだ？弟よもうもう少しぐらい修行するぞ！
そのくらいやんなきゃ・・・弱いまだぞ・・・」

（まじかよ！・・・無理無理！何か・・・いい手は・・・そうだ！」

「兄貴！そろそろポ モンの時間だぞ！いいのを見なくて？
兄貴の好きなアニメだぞ」

「し！しまった！忘れてた！今日の修行はここまでだ！」

（フ！勝った・・・」

兄は急いで道場から出て行った・・・疾風の如く・・・

修行を終え部屋に戻る蒼馬・・・すると部屋にあるはずの無い
不思議な鏡が置いてあったのだ・・・

「なんだ？この鏡・・・俺の部屋に置いてあったか？兄貴のかな？
でもなんで俺の部屋に兄貴の鏡が・・・？」

と誰のか確認しつつ触ってみた

・・・すると！！

・・・なにもなかった

「なんだよ！すげー期待しちゃったじゃん！
まあちよつとだけ・・・寝るかな」

と蒼馬がベットで横になった瞬間！

（！？なんで鏡が光ってるんだ？）

蒼馬は鏡の触れてみた・・・

「嘘だろ！？鏡の中に手が入っただ！？仮面ライダー
かよ！
？」

なんと！鏡の中に手が入ってのだ！そして・・・

「おいおいおい！ひ・・・引きずりこま・・・あゝ・・・」

蒼馬は体全体鏡の中に吸い込まれていった・・・
そして・・・蒼馬が目を開けると・・・そこは！

（なんだここ・・・周りも何かも真っ白世界かよ・・・
一体ここはどこだ？夢なのか？）

「こんにちはわ」

「だ・・・誰だ！？」

第一話 時の始まり（後書き）

作者「ダメダメだな・・・OIL」

作者「内容考えてて5話くらいからはいいけど・・・」

作者「最初のほうは内容思い浮かばないw」

作者「しかし頑張らないと」

作者「アドバイス 感想など待ってますm - - m」

作者「次回もよろしくです」

第二話 運命（前書き）

どうもですm - - m

前回と少し書き方が違います^^ ;
よろしく願います

第二話 運命

「こんにちわ」

「だ・誰だ!？」

突然背後から声がしたので向いてみると・
女の人が立っていた・

(だ・誰なんだ?この人・)

「ど、どなた様でしょうか？」

「女神様です」

「・・・・・・はい？」

(ん)と・女神様?・この人大丈夫か？」

「え」と冗談はやめてください」

「冗談では無いですよ」私は本物の女神様です」

女神様なんて・この世に存在するのだろうか・
なんて考えながら蒼馬は質問した

「え」と女神様ここはどこですか？」

「現実の夢の狭間です」

「現実と夢の狭間?なんですか?それ」

意味不明な言葉に焦る蒼馬それから女神様から
いろいろと詳しい説明を聞いた

「つてな感じです」

「俺の部屋に戻してください」

「あなたに頼みごとが・・・」

「戻してください」

「あなたに・・・」

「戻してください！」

「黙って人の話聞けや！小僧！」

「すみませんでした！！！」

（怖いよー女神様怖いよーもの凄い黒いオーラが・・・
女神様ってこんな怖い生き物だったのか・・・）

「あなたにロギアーヌを救ってもらいたいのです！」

「ロ、ロギアーヌ？どこですかそこ？」

「行けば分かります！では！頑張ってください^^ノ」

「え！？強制ですか・・・えー」

蒼馬は光に包まれ前が何も見えなくなった・・・

・・・気がつく・・・

「ここは・・・どこだ？ロ、ロギアーヌってどこかな？」

周りは爆発後のマンジョンのように今にも崩壊しそうだった
周囲は燃えていて地割れも起きている・・・

（おいおい！いきなりの死亡パターンですか！？あれ？
あれは・・・女の子か！？あの場所は危ない！」

少女の真上から岩が落ちてきたのだ

「くそ！しょうがない・・・紅風車！疾風！」

ドゴォーン！

抜刀と同時に放たれた斬撃で岩は粉碎されたのだった・・・

兄

「あれ？蒼馬がいないな・・・あいつの部屋の刀2本無くなってるし・・・

ま！まさか家出か！？・・・あの馬鹿者が・・・」

と

鏡の存在に目も触れず兄は蒼馬が帰ってくることを特に心配せずに・・・そのまま寝てしまった・・・

蒼馬

「おい！大丈夫か？怪我は・・・特に無さそうだな」

「ありがとう お兄ちゃん」

「ああとにかく！ここから脱出しよう！走れるか？」

「え」と・・・

少女は下を向いて何か考えていた・・・

「お母さんが知らない人についていたらダメ！って言ってた！」

（なに！！この状況で・・・まさかそのセリフが・・・ど、どうする？このままダメだし・・・」

「い、今知り合った！だから行こう」

「ちよつと待ちなさい！！」

???

「誰かゝ誰か居ませんか？」

（もう人はいないのかな？・・・もうちよつと奥まで行って見ようかな・・・）

すると男の子と女の子に連れられそうなのを発見した

「あ！あれは！助けないと！！ちよつと待ちなさい！！！」

蒼馬

「だ・・・誰ですか！？」

「空間管理局 空戦隊 二等空士 雪村有紗！その子を渡して！」

「く、空間管理局？なんだそれ？」

「そんなことはいいから誘拐犯！その子を渡しなさい！」

（誘拐犯！？お・・・俺誘拐犯扱いされてるし！

ただ助けようとしてるだけなのに）

「俺誘拐犯じゃないですよ！ただ助けただけですよ！」

「言い訳するのなら・・・覚悟はいい？武器を捨てないのなら・・・」

「え？え？そ・そんな・・しょ、しょうがない！」

つてな感じで

戦闘になつてしまいました・・成り行きつての・・
とっても怖いです・・

「こっちから行くよ！！」

「ストリームバスター準備OK？」

「マスターいつでも」

(つ・・杖がしゃべった？・・・どここのアニメだよ！？)

「エクシード・・ブラスター！！！」

黄色のビームみたいなのが飛んできた・・

(おいおい！どこのモビ スーツだよ！？

ニュー イプですか？あいつは！)

なんとか回避に成功した蒼馬

しかし！

爆風で蒼馬ふつとんでしまった・・

「な！なんだよ！あれ・・反則だろ・・ならこっちも・・」
「蒼狼天一閃！！」

「高速の抜刀で3つの斬撃をとばす技だ！そう簡単には！」

「ストリームバスター！モード・・グレーナル！」

「OKですマスター」

突然相手に持っている杖が変形して槍の形になったのだ

「アクセルストーム!!」

もの凄い速さで突進してきた蒼馬は反応し切れずかすってしまった
反射神経だけで動いた蒼馬に今の動きは完璧に見えていなかった・

・

「な・・・なんだ今の速かった! 追いつけないな・・・
どうする・・・そうだ! 女神様から貰ったパートナーカードとやらで!

・
・
・

女神様からロギアーヌ救出を頼まれた蒼馬

女神様からパートナーとして魔力生命体のパートナーをもらった
のだった

今! それを使うとき!

「でてこい!・・・名前は・・・空馬!!!!」

パートナーカードから20cmほどの妖精が出てきた

「お、お前が俺のパートナーか? 頼むあいつを倒す術を
教えてくれ!」

「はい マスターが言うならば! あれは長距離タイプの魔法使いで
すね

近距離専門っぽいマスターなら大丈夫なのでわ?」

「それが無理だから呼んだんだけど・・・頼む!」

（今までの戦闘見てたのか？長距離専門とか・・・）

「武器ユニゾンしましょう！武器と私の合体技です！」

「それで倒せるのか？武器ユニゾンってやつで・・・」

「マスターの魔力なら20分は大丈夫でしょう・・・今から言うことを実行してください」

空馬から武器と武器との合体のしかたとユニゾンのやり方を
教えてもらいながら逃げていた・・・

「よし・・・行くぞ！紅蒼閃刀と狼双疾風と合体させてユニゾンだ
ろ！？」

「はいマスター！行きますよ！」

「武器ユニゾン！！」

その言葉の後武器の中の空馬が入っていき
二つの武器を合体させた・・・そして
一つの刀が完成したのだ！

「紅桜蒼穹刃！！！」

第二話 運命（後書き）

作者「いきなりの戦闘です・・・普通のシーンも書くのヘタなのに・

・

戦闘シーンだなんて・・・無理です><・・・どうだったでしょ
うか？

戦闘ってより・・・説明やら技やら・・・そんな感じでしたね次回こそは
もっと面白い戦闘シーン・・・頑張りますm - - m

最後まで読んでくださってありがとうございます

次回もよろしく願いますm - - m」

第三話 神召喚者ベル（前書き）

どうもですm - - m

前回はパートナーの空馬に武器ユニゾンのやり方を教えてもらい

実行ですねえ^^

蒼馬VS有紗です^^

第三話 神召喚者ベル

「よし！．．行くぞ！紅蒼閃刀と狼双疾風と合体させてユニゾンだろ！？」

「はいマスター！行きますよ！」

「武器ユニゾン！！」

二つの武器が重なり．．その中に空馬が入っていった．．武器が輝き一本の長刀が完成したのだ！

「紅桜蒼穹刃！！！」

これが．．武器ユニゾンかスゴイ力を感じる

空馬が言うには俺の魔力値が上がれば武器はさらに強くなるそうだ．．

「やっと見つけたよ誘拐犯君．．パートナー出して逃げるだなんてでも．．もう逃げられないよ！」

「もう逃げる必要は無い！行くぞ！」

「こっちも行くよ！ストリームバスター！！モード．．シューティング！」

相手の武器が変化し もの凄い勢いで魔力を貯めはじめる

「これが．．私の必殺技！行くよ！！」

「俺だって．．行くぞ！！」

お互いの一撃必殺．．決まったほうが．．勝つ！

「シューティングスター！ブレイカー！！」

！！！！

もの凄い量の魔力の砲撃がとんできた・・・
くそ！・・・どうする！？

「私の・・・勝ちだよ！」

「まだだ！！！」

（空馬！さっき言ってたやつ！いけるか？）

（はい！いつでもOKです！」

（転移魔法陣！起動！5秒後に転移します！）

すると

俺の立っている場所に魔法陣ができた・・・

「5秒か・・・ギリギリ間に合うか・・・」

もの凄い遠くからとは言え

シューティングスターブレイカーは・・・速い！

（5秒経ちました！転移します！）

「決まったね！私の勝ちだよ！！」

ドゴオーン！！！！

地面に穴が空くようなもの凄い威力・・・
あれを喰らってたらと思うと・・・考えたくない・・・

「俺は・・・ここだ！」

「う、うそ！なんで後ろに!？」

「これで・・・とどめだ！」

「蒼天破一閃!!」

一瞬で相手の懐に飛び込み抜刀で決める・・・と思った瞬間！
俺と有紗は何者かによって吹き飛ばされた

「なに!？」

「だ・・・誰!？」

「君達はこの物語で重要な人達なんだ 死んだらダメだよ」

黄色の髪の子がことらに向かつてそう言った・・・

「空間管理局の女の子・・・その人は誘拐なんかしてないよ」
「女の子を助けただけだよ」

（そのとおり!!救世主キタア～）

有紗は何も言わず黙っている・・・

「あなたは・・・神召喚者ベルですか?・・・」
「・・・よく知ってるね・・・」

（ベ・・・ベルですって!?!?そんな・・・）

（空馬知ってるのか?・・・ベルって・・・）

（この世の中で今のところ最も強い人です・・・）

（な!なんだって!?!?）

「何故あなたがここに？殺しにきたのですか？」

「違うよ 次元の使いの実力をね・・・」

「じ・・・次元の使い誰ですか？」

「そこにいる・・・井上蒼馬君だよ」

俺が次元の使い？なんだそれ・・・

俺は女神様に頼まれて・・・ってそれが

次元の使いってやつなのかな？実力をつて・・・

「こ！この人は次元の使いなんですか！！??」

「そうだよ」

「蒼馬さん・・・逃げましょう・・・殺されます・・・

二人では勝ち目がありません・・・あなたが次元の使いなら・・・
お守りします！」

次元の使いってそんなスゴイのか？

でも・・・逃げたほうがいいな・・・

あのベルってやつ・・・威圧感が凄すぎる・・・

「待たないよ！行くよ！」

（空馬！全力魔力で転移だ！二人転移いけるな！）

（はい！そう遠くまで行けません！1分もたせてください！）

「おい！有紗ってやつ！転移するから一分逃げるぞ！」

「え！？あ！うん！逃げるよ！」

「逃げさないよ！」

万事の王 その名の力と源に

全を滅するは地の光 無を滅するは天の光

天地の光 魔弾の邪王！

「天魔邪天砲！！」

一瞬だった・俺達の隣にあるビルが・
そこになかったかのように消えたのだ・

「あ！あんなのありかよ！反則並みだろ・」

「と！とにかく一分時間を！」

逃げるか？戦うか？どちらにせよ一分もたせる自身は無い・
・・・戦うか・

「紅時空両断！」

「遅い！そんな攻撃・見切れるよ・」

「そ！そんな・」

刹那の抜刀術だったはず・なのに！何故・
回避できたんだ！？

「それじゃ・・・実力を見せてもらおうよ・」

第三話 神召喚者ベル（後書き）

作者「ご感想ありがとうございますm・・・m」

作者「蒼馬君死亡フラグだね・・・」

蒼馬「まだ死にたくないぜ・・・」

作者「頑張ってくれ 応援してるよ」

蒼馬「お前が言えることか・・・」

作者「まあとにかく次回も頑張りますのでよろしくです」

第四話 空間管理局（前書き）

有紗と蒼馬の戦闘に乱入してきたベル・

蒼馬の実力を見極めると言っている

転移するまで一分間・・・耐え切れるのか???

第四話 空間管理局

「実力見せてもらっよ・・・」

ベルがそう言った瞬間ベルの両手に魔力が集められた

「行くよ・・・メルトクリムゾン！」

「くそ！舐めるなよ！蒼龍天王斬！！」

ベルの両手から二つの紅い弾

蒼馬剣から蒼い龍が・・・

激突した！！

ドゴォーーン！！

もの凄い爆発が起きた・・・

「い、今のが限界かな・・・魔力が・・・」

（マスターこちらに魔力反応！！）

（まだくるか！）

「まだ序章だよ！朱雀炎舞！」

ベルは両手に炎をやどすと踊るように攻撃してきた
・・・今の俺では耐え切れない・・・

「エクシードバスター！！」

「へえゝ君も戦うのかい・・・」

有紗のエクシードバスターを簡単に避けると
ベルは有紗に向かって突撃していった・

（マスター転移準備完了！転移魔法陣発動！）

（よし！いけるか！？）

（有紗さんを魔法陣の中へ！！）

「よし！有紗！魔法陣のなか・へ・」

有紗のほうを向いたが・すでに有紗はこちらに
吹き飛ばされていた・・ベルによって・

「いいよ お疲れ様・君の実力も分かったしね その子は気絶し
てるだけだよ^^」

「俺達を逃がしているのか？・」

「実力を見に來ただけだからね・」

「次は負けない・」

俺はそう言つて転移魔法を発動させて消えていった・

「・・・楽しみにしてるよ・井上蒼馬君」

（マスター転移完了しました）

（ここは・どこ？）

「空間管理局本部アルカチアスだよ」

「あ、有紗・大丈夫なのか？」

「う、うん・大丈夫・転移してなかったら危なかったね」

そう言つて話していると奥のほうから数人の人達が走ってきた

「有紗！大丈夫！蒼馬君！転移してくれてありがとう！」

「あ、いえいえ・・・」

「皆々大丈夫だよ！それより・・・」

「そうだね・・・」

すると全員がこっちを向いて有紗が言った

「蒼馬君いろいろとお話あるけど・・・いいよね」

「え？ああゝはい」

俺達は奥のほうにある部屋に入った・・・

「ベルとの戦闘見させてもらいました・・・次元の使いだそうね？」

「そうらしいですね・・・」

「単刀直入に言います・・・空間管理局に入りませんか？」

「え！？」

驚いた・・・いきなりすぎる・・・

「失礼私はアレックス・ローリー空間管理局の管理長よ」

「え・・・あ！井上蒼馬です　よろしく・・・」

「井上蒼馬君・・・さっきの質問の答えは・・・」

（どうする・・・空馬・・・）

（行く場所も無いならいいのでは？ログイアーヌを救うなら・・・ここを拠点にしたほうが

いいかもです）

（そうか・・・）

「いいんですか？見^ず知らずの人をいれても？」

「あなたの實力は見せてもらったわ・・・すごい剣術ね」

「ありがとうございます・・・」

「空間管理局は人数不足なのよ！いいかしら」

「そちらがいいのであれば・・・お願いします」

「決まりね！改めて！ようこそ空間管理局へ！」

こうして空間管理局へと入隊したのだった・・・

第四話 空間管理局（後書き）

作者「空間管理局入隊おめでとう」

蒼馬「んまあゝありがとう」

作者「次回は管理局の詳しい説明と部隊説明かな」

蒼馬「なんかスゴイ急展開だな・・・いいのか？」

作者「・・・いいんじゃない？ww」

蒼馬「いいのか・・・」

作者「うん！」

作者「感想ありがとうございましたm・・・m次回もよろしくです」

第五話 陸空試験戦闘（前書き）

突然空間管理局への入隊を頼まれ
入隊をOKした蒼馬

有紗・アレックスに管理局の説明を受けていた・・・

第五話 陸空試験戦闘

「空間管理局は主に3つの部隊に別れているわ」

「戦闘部隊・補助部隊&医療部隊・オペレート部隊だわ」

3つの部隊

戦闘部隊 主に前線にでて敵を残滅する部隊 陸・空・空間の3つの部隊がある

補助部隊 戦闘部隊の回復と補助や情報収集が仕事

オペレート部隊 現状を伝えたり 機会での仕事が多い

「もちろん 戦闘部隊に加入してもらおうわ・・・」

「はい・・・」

「部隊は今から試験戦闘をして決めさせてもらいます」

「試験戦闘」

試験戦闘

部隊を決めるため 陸・空・空間で戦闘を行い
動き 魔力値 戦闘に仕方を見ること

「では明日の朝8時から試験戦闘を行います！寝坊はダメだよ」

「はい！お願いします！」

「部屋は用意したのでから そこを使つてね」

「ありがとうございます」

俺は部屋に戻って明日のこと・・・それからのことを考えた

（成り行きって凄いな・・・）

（マスター明日の相手は 有紗さん フェルガ？さん らしいです）

（確か・・・音速のフェルガだっけ？）

（とても強いらしいですよ）

（頑張ってくださいね もう寝てください）

（ああ・・・）

俺は明日に備えて寝ることにした・・・

（マスターマスター7時ですよ起きてください9

空馬の声で起きてみると・・・もう7時だった

「よく寝たな・・・でも眠いな・・・」

（今日は試験戦闘ってやつですね 頑張りましょう

（ああ・・・まあ無理しない程度に・・・」

俺は試験の準備して試験場所に向かった・・・

「お！きたきた蒼馬君 おはよ」

「ああ・・・有紗おはよう・・・ってことは・・・」

「最初は空の試験相手は私だよ」

「まあ前回の決着かな・・・」

「負けないよ」

「お二人とも戦闘準備をお願いします」

「はい」

（ここでやるのか・・・）

真ん中に島っぽいのがあって……他は空か……
確かに空の試験ってやつだな……

「ルールは簡単 魔力切れか気絶だよ」

「わかった……」

「んじゃ……スタート!!」

（行くぞ!空馬!）

（OKマスター!）

「先手必勝!ストリームバスター!ランド……シュート!」

10個ほどの小さい魔力の弾が飛んできた……

「紅風車!疾風!」

「その技はよめてたよ!」

疾風で弾を打ち落としたが有紗は読んでいたかのように回避し
魔力を溜め始めた……

「あれか!やらせん!蒼馬飛燕!」

「!!!!どこにいったの?」

「ここだ……」

「え!?!」

高速移動で背後に回ってからの攻撃……決まるか?

「ストリームバスター!デュフェンドバリア!」

「OKマスター」

有紗の背後のバリアが展開された
蒼馬の攻撃は簡単にはじかれてしまった・

「今度はこっちの番！エクシードバスター！」

（マスターこっちで対処します！まかせてください！）

（ああ・・・頼むぞ！）

（はい！現れよ！「輝きを持つ変化結晶体」クリスタルランサー！！

空馬が言つと結晶体のような物が現れ形が変化していつて
盾のような形になったのだ！

「え！？なにそれ！見たこと無いよ！」

有紗のエクシードバスターは結晶の盾により弾かれた・

「いくぞ！紅双翼襲撃！」

「く！そう簡単に喰らわないよ！」

狼双疾風で速攻攻撃！相手が反撃してきたら紅蒼閃刀での抜刀斬
撃！

「甘いよ！ストリームバスター！モード・グレイナル！ブレイン
ダッシュ！」

モード変化させると高速で後方へ消えていった
そして魔力を溜め始めた・・・

（マスター砲撃をしてきます距離を詰めるか回避を！）
（わかってる！）

（身体ユニゾン・・・いくぞ！）

（OKマスター！）

「え！？蒼馬君の体が光ってる！！」

ユニゾン！完了！

「蒼馬君武器が・・・変わってる・・・」

「ああ・・・ユニゾンすると魔力値は上がって武器が変化するんだ」

長刀 蒼天夜叉紅桜

紅蒼閃刀の進化刀・・・少し長くなり 紅色と蒼色の混ざったオリヲを出している

抜刀のスピードも上がり技に切れが増す

短刀 狼牙双連刀

狼双疾風の進化刀・・・所有者のスピードを上げ視力も上がる
一部の魔法も使用可能になる

「ここからが・・・本番だ！」

「うん！いくよ！」

「ストリームバスター！モード・・・シューティング！！」

有紗の杖があ那时的砲撃状態になった・・・

一撃で終わらせてくるか・・・

・・・なら・・・こちらもだ！

「シューティングスター・・・」

「蒼龍・・・」

お互いの必殺技・・・・

「バスター!!!」

「天王斬!!!!」

第五話 陸空試験戦闘（後書き）

作者「盛り上がってきたかな？」

蒼馬「盛り上がってきたんじゃない？え？」

作者「盛り上がってることを願うよ・・・」

蒼馬「次回も戦闘だな」

作者「試験頑張ってくれ^^b」

蒼馬「・・・まあな」

作者「感想くれた方々ありがとうございます」

作者「また ご感想ありがとうございますm・・・m」

作者「誤字だから駄文ですが」

作者「次回もよろしく願いますm・・・m」

第六話 音速の戦士（前書き）

空間管理局入隊となつた蒼馬・・・しかし！
試験戦闘をやらなばいけない・・・
最初の戦いは空・・・相手は有紗！
ユニゾンして互いの必殺技を放つ・・・
どうなったのか・・・

第六話 音速の戦士

「シューティングスター・・・」

「蒼龍・・・」

お互いの・・・必殺技！

「ブレイカー！！」

「天王斬！！！」

ドゴオーン！！

もの凄い衝撃波と凄まじい音がでた・

（マスター大丈夫ですか！？）

（ああ〜なんとかな・・・）

「さすが蒼馬君・・・あの技を止めるなんて・・・」

「有紗こそ・・・まさか耐えるとはな・・・以外だ」

「舐めちゃダメだよ〜ここからだよ！」

そう言う和有紗の下に魔方陣が出てきた

「汝の動き止めるは魔力 動くは魔法！」

「意味不明な言葉だな・・・」

「バイススライド！」

有紗は呪文を唱え終わっと思ったたら・・・
体が縛られていた・・・

「な！なに！？これは・・・こそ！体が！」

「ふふふゝこれで終わりだよ！」

（マスター有紗さんの方から凄い魔力が！）

（これを解かないと！）

「まさか蒼馬君に使うなんて・・・さすがだね」

「え？・・・」

「これが・・・私の最大にして最強の必殺技だよ！」

こりゃゝ死亡フラグかな？いや・・・諦めるには早い・・・

（マスター一つ方法が・・・あります）

（方法・・・あれか・・・）

（今のマスターの魔力では5分が限界ですけども・・・）

（行くぞー！！）

「！？蒼馬君の体が！？輝いてる・・・」

「行くぞ・・・フルユニゾン！！」

フルユニゾン

自分の限界魔力値を一定の時間だけ超えて最大の能力を引き出す
しかし終了後は魔力が空っぽになってしまう・・・

「フルユニゾン！空馬IN蒼天夜叉紅桜！」

「す、すごい・・・武器が・・・なにあれ？かつこいいかも・・・」

有紗は見惚れていた・・・蒼馬の武器の輝き・・・
見た目・・・に

「これが・・・今の俺の力で出来る紅蒼閃刀の最終形態だ・・・」

「これが・・・蒼馬君の本気か・・・私も負けない・・・」

「・・・紅蒼ゼノンに輝く夜天フォースの刃」！！

「紅蒼ゼノンに輝く夜天フォースの刃」

紅蒼閃刀の現段階最終形態　刃にとっても濃い魔力のオーラをまとっている

所有者の魔力　身体能力を上げ　抜刀最速刃の名もあるw

「行くぞ・・・有紗・・・加減はしない・・・」

「こつちだつて・・・負けないよ！」

有紗の杖の先にすごい魔力・・・シューティングスターブレイカーよりも

凄い魔力だな・・・

「マスターチャージ完了です」

「うん！行くよ私の必殺奥義！」

「俺だつて・・・負けない・・・」

お互いの必殺技・・・これで決まる・・・

「グランド・オブ・ザ・・・」

「かっこいい名前だな・・・」

「バスター！！！！」

すげえ・・・さっきの技以上だな・・・こりゃ・・・やばい
範囲も威力も凄いだろうな・・・

（魔方阵展開 3・・・2・・・1・・・転移！）

ピーーン！

とてつもない衝撃波と光と音・・・さつきとは比べ物にならん・・・
これが有紗の最大奥義か・・・すごいな・・・

「か・・・勝ったかな？・・・やり・・・すぎたかも・・・」

「まだだ・・・」

「え！？なんで後ろに・・・転移！？」

「大正解だ・・・」

転移で有紗の後ろに回りこみ・・・

「これが最大奥義だ・・・紅桜蒼天流・・・奥義」

「紅蒼天零閃！！」

刹那の抜刀剣撃・・・

「す・・・すごいや・・・」

浮かぶ島を真つ二つにして・・・有紗にも大ダメージの様子
有紗は落ちていった・・・

「試合終了！勝者！蒼馬君！」

こうして一戦目の空の戦いは終了した・・・

「次は音速の戦士フェルガちゃんね・・・」

第六話 音速の戦士（後書き）

作者「一戦目お疲れ様〜っす」

蒼馬「最初っから出し切った感じだな・・・」

作者「・・・ですねw」

蒼馬「技名と武器名はいい評価もらってるな・・・」

作者「その二つは！ね・・・」

作者「そんなところさ・・・><」

作者「それでは・・・」

作者「感想ありがとっですm・・・mまたよろしくですm・・・m」

作者「次回も見えてやってくださいですm・・・m」

第七話 疾風怒濤（前書き）

空の試験を無事合格し部屋に戻る蒼馬
次の試験は陸・相手は噂のフェルガ
無事陸の試験を終わらせることが出来るのか？

第七話 疾風怒濤

空の試験を終え部屋に戻る蒼馬

明日の準備をしながらコーヒを飲んでいた・・・

（疲れた・・・あそこまで疲れるとは・・・）

（フルユニゾンしましたもんね・・・お疲れ様です）

すると・・・

コンコン・・・

「はい！～どうぞ」

「お、お邪魔します」

「・・・」

蒼馬も見たことの無い人・・・
管理局の人なんだろうか・・・

（フェルガさんですね・・・）

（あれが噂のフェルガさんか・・・）

「ど！どうも・・・陸の試験担当のフェルガです・・・よろしく・・・」
「こちらこそ よろしくお願いします」

（なんか相手が緊張気味だな・・・）

（そのようですね・・・）

「何か飲みますか？」

「いえ・・挨拶だけです。失礼します・・明日はよろしく」
「あ、はいお願いします」

そう言つてフェルガは去つて行つた
そして蒼馬は明日の準備を終えて眠つたのだつた・・・

（マスターマスター起きてください）

空馬の声で目覚める蒼馬・・・

「もうちょい寝たいが・・しょうがない・・・」

時間は7時・・試験開始は8時だ・・
蒼馬は準備を終え試験会場に向かうのだつた

「こ、これは・・・街？」

「そうよ・・舞台は街これが陸の試験会場よ」

たくさんのビル・・本当に街のようだ・・
人がいれば絶対街に見える・・・

「ではお二人準備してください・・」

（マスターフェルガさんは数多くの武器を使用します・・頑張ってください）

（ああ・・頑張るさ）

「準備はいいですか・・・スタート!!」

こうして陸の試験は開始された・・

「行くよ・・・蒼馬君！ソニックブースト！」

消えた・・・一瞬で視界から消え・・・そして

「ここだよ！」

「後ろか！読んでいましたよ！蒼馬飛燕！」

さらに後ろに回り攻撃・・・

「甘いよ蒼馬君・・・モード！ファルコン・・・」

フェルガの武器は双剣から双鎌に・・・

「屍殺し・・・はあ！！！」

数多くの斬撃がとんできた

「紅風車！疾風！！！」

お互いの斬撃は相殺されフェルガさんが動いた

「雷帝放電波！！！」

「く！紅鳳凰波！！！」

お互いから放たれた衝撃波も相殺され
お互い高速の戦いを繰り広げる・・・

（マスターユニゾンしましょう！）

（わかった・・・行くぞ！ユニゾン！）

（OKマスター）

蒼馬はユニゾンをしフェルガは魔力を溜め始めた

「ユニゾン完了・・・蒼狼天一閃！」

「速い！！こつちだって・・・神速雷撃斬！！」

カキーン！カキーン！

お互いの高速移動しながらの攻撃のし合い
その速さは一般人では追いつけないほど・・・

「さすが音速の戦士・・・強いですね・・・」

「有紗に勝ったほどの実力あるね・・・」

攻撃のやり合いは終了しフェルガが魔法を使用し始めた

「貫け天の雷 裁きと怒りの雷撃・・・ここに！」

空・・・雲の様子が変化し雷雲になっている

・・・こりゃやばいな・・・

「バイオレンスサンダー！！！」

数にして15くらいの雷・・・速い！！

ドゴゴーーン！！

「これなら回避できないはずだよ・・・」

直撃・・・蒼馬は回避する術もなく・・・直撃した・・・

・・・しかし!!

「まだまだです・・・よ」

「う!うそ・・・直撃のはず」

蒼馬は直撃どころか・・・フェルガの背後にいた・・・

「これ・・・終わりだ!蒼龍天王斬!!」

「くう!耐え切れない!」

ズバン!!

蒼馬の蒼龍天王斬は直撃しフェルガは吹っ飛んだ・・・

「な、なんでバイオレンスサンダーを!?」

「よく見てみてください・・・」

「・・・あれは!?」

蒼馬はバイオレンスサンダーの直撃前に

クリスタルランサー

空馬の「輝きを持つ変化結晶体」によって

自分の姿の偽者を作りだし逃げ出していた・・・

「空馬の話だとバイオレンスサンダーは魔力を感知して当てる技ですよね」

「大正解・・・すごいね蒼馬君・・・」

「これで終わりです・・・!!」

蒼馬がフェルガに突っ込む・・・しかし!

「それはこっちのセリフだよ・・・」

「なに!？」

フェルガは背後にいた・・・速くて蒼馬には見えなかった・・・

「屍殺し!」

「間に合え!紅風車」疾風!」

さつきみたいに相殺を狙ったが全てを
相殺できず一発直撃した・・・

「くう!これくらいなら!」

「まだだよ・・・隼切り・・・」

「紅桜繚乱!!」

お互いの高速剣撃・・・

「さすが蒼馬君・・・切り返しも上手だね・・・」

「ありがとうございます・・・」

「でも・・・これで最後だよ!」

フェルガが言うと雷がフェルガに落ちて
フェルガの武器に雷が纏う・・・

「雷天爆砕・・・フレアサンダー!!」

上空から槍のような雷とフェルガの雷を纏う斬撃
両方回避は・・・無理そうだな

（行くぞ!フルユニゾンで狼牙双連刀だ!」

（OKマスター!!」

（フルユニゾン！IN狼牙双連刀！）

ドゴーン！

もの凄い音とともに蒼馬にいた場所の地面は吹き飛び
地面には電流が流れていた・・・

「蒼馬君の反応が・・・無い!?」

「後ろですよ・・・フェルガさん」

「!?!?その武器は?」

「ウルフ狼牙に煌く光速刀ジェネレート」

「ウルフ狼牙に煌く光速刀ジェネレート」

現時点での狼双疾風の最終形態 光速の速さを手に入れるが
攻撃の威力防御面では良くない 敵を惑わす技も使用可能

「これで最後だ!!」

「くう!間に合わない」

「紅疾風怒涛!!」

蒼馬の光速移動しながらの連剣撃・・・勝負有りだ・・・

「スゴイや・・・蒼馬君・・・私の・・・負けだよ・・・」

「フェルガさん・・・お疲れ様です」

「勝者!蒼馬君!陸の試験終了」

こうして第二の試練陸の試練は終了した・・・
次は・・・最後の試練だ・・・

第七話 疾風怒濤（後書き）

作者「お疲れ様です^^蒼馬君」

蒼馬「疲れた・・・寝る」

作者「次で試験最後だね！頑張ってくれ」

蒼馬「お前のほうが頑張れ・・・」

作者「・・・・はいTOT」

蒼馬「書き方ナド以外はいいい評価いただいてるな」

作者「そうだね・・・」

蒼馬「頑張れよ・・・先は長いぞ・・・」

作者「頑張ります！それでは」

作者「ご感想ありがとうございますm・・・m」

作者「感想よろしく願いしますm・・・m」

作者「次回もよろしくです」

外伝 紹介しましよの巻（前書き）

今回は今まで登場した武器 技を紹介したいと思います
よろしく願います m - - m

外伝 紹介しようの巻

「今回は俺の技を紹介する予定だ」

「蒼馬君凄い技使うもんね〜私達も頑張ろうねフェルガちゃん」

「うん！頑張ろうね」

「基本は抜刀だ・・・」

紅桜蒼天流〜+

紅風車〜疾風

抜刀して斬撃を飛ばす技 蒼馬はけっこう気に入っている
フルユニゾンすると 一気に3つの斬撃を飛ばすことが可能

蒼狼天一閃

高速の抜刀術での居合い一閃 斬撃のそばせて
間合いを一瞬で詰めることが出来る

蒼天破一閃

一瞬で懐に行き抜刀 抜刀のスピードが命
フルユニゾンすれば残像が出来るほど

紅時空両断

刹那の抜刀術 空間をも斬る速さの技

蒼龍天王斬

刀に魔力を乗せて龍の形の斬撃を飛ばす技
かなりの威力を持っている・・・

蒼馬飛燕

高速移動後背後から敵を斬る技
ユニゾン後は残像の出来る速さ

紅双翼襲撃

短刀での速攻攻撃後 後ろに下がって斬撃を飛ばす技

紅蒼天零閃

紅桜蒼天流抜刀奥義 刹那の抜刀で見えない斬撃をとばし
破壊する技 鋼の塊も真つ二つになる・・・

紅鳳凰波

衝撃波を飛ばす技 主に敵の技との相殺が狙い

紅桜繚乱

高速の連撃 相手の体全体を斬りつける技

紅疾風怒濤

フルユニゾン後で光速の連撃奥義
光速移動しながらでも可能

「今のとこ技はこんくらいだな・・・」

「蒼馬君ってチートだよね〜ユニゾンとかさ〜」

「空馬に言え・・・あいつがチートだ」

「次は武器（ユニゾン以降）の紹介だ」

紅蒼閃刀＋狼双疾風＋空馬（武器にユニゾン）＝紅桜蒼穹刃

紅桜蒼穹刃

蒼馬の現魔力で出来る武器ユニゾン武器

紅色の魔力を纏っており 見た目が美しく技の切れが増す

紅蒼閃刀ユニゾン後Ⅱ蒼天夜叉紅桜

蒼天夜叉紅桜

紅蒼閃刀の進化刀・・・少し長くなり 紅色と蒼色の混ざったオリを出している

抜刀のスピードも上がり技に切れが増す

狼双疾風ユニゾン後Ⅱ狼牙双連刀

狼牙双連刀

狼双疾風の進化刀・・・所有者のスピードを上げ視力も上がる
一部の魔法も使用可能になる

蒼天夜叉紅桜＋「輝きを持つ変化結晶体」＋フルユニゾン

Ⅱ「紅蒼に輝く夜天の刃」

「紅蒼に輝く夜天の刃」

紅蒼閃刀の現段階最終形態 刃にとっても濃い魔力のオーラをまとっている

所有者の魔力 身体能力を上げ 抜刀最速刃の名もあるw

狼牙双連刀＋「輝きを持つ変化結晶体」＋フルユニゾン

Ⅱ「狼牙に煌く光速刀」

「狼牙に煌く光速刀」

現時点での狼双疾風の最終形態 光速の速さを手に入れるが

攻撃の威力防御面では良くない 敵を惑わす技も使用可能

「まあ現時点ではこんな感じかな・・・」

「蒼馬君も十分強いよ・・・頑張ろっねフェルガちゃん」

「うん・・・有紗・・・」

二人は最初よりテンションが低くなるのであった・・・

外伝 紹介しましよの巻（後書き）

作者「・・・強いね・・・十分」

蒼馬「そうか？チートキャラに比べたら・・・」

作者「まあ・・・そうかもだけど・・・」

蒼馬「武器名 技名に気合いれず本文に気合いれろ！！」

作者「頑張ります！！」

作者「本編にあつてここに無い技名がありましたら教えてください」

作者「それでは ご感想ありがとうございますm・・・m」

作者「感想よろしく願いますm・・・m」

作者「次回もよろしくです」

第八話 空間と無限の闇（前書き）

音速の戦士フェルガとの激戦を終え

残す試験は後一つ・・・相手は駆動花蓮 闇の魔法使いらしい

有紗やフェルガよりも強い噂で実力はあるらしい

戦闘場所は空間地帯 宇宙空間に似ている場所らしい

第八話 空間と無限の闇

陸の試験をクリアして部屋に戻る蒼馬
明日の試験のことを考えていた。

（明日で最後か・・・空間ね・・・）

（相手は駆動花蓮さん上級魔法を使いこなす魔法使いです）
（相手にとって不足無しだな・・・）

すると・・・

コンコン・・・

「蒼馬君　遊びに来たよ」

「有紗とフェルガか・・・どうしたんですか？」

有紗とフェルガが遊びに来た・・・なんのようだろう？

「さっき言ったでしょ　遊びに来たよって」

「遊びに来たんですか・・・まあ座ってください」

「うん！ありがとう」

そう言つと有紗は椅子に座らず

蒼馬の背中に密着してきた・・・。

「あ、有紗、ど、どうしたんだ！？」

「えへへ　気にしないの　（／／／）」

「とにかく離れる・・・」

「え　もう　はい・・・」

(マスターも、うれしいなら　うれしいと)

(・・・もう一度言ってみる・・・)

(すいませんでした・・・)

「明日は花蓮ちゃんが相手だね恩　頑張ってね」

「ああ・・・まあ負けないように頑張るさ」

「花蓮は闇魔法を得意としてるからね・・・頑張っ」

そんなに対戦相手の情報を言ってもいいのだろうか？

と疑問に思いながら1時間ほど話をして有紗達は帰っていった・・・

「空間か・・・寝るか」

蒼馬は寝ることにした・・・すぐに睡魔に襲われ

蒼馬は深い眠りに落ちた・・・

(マスターマスター朝ですよ)

いつもの空馬の目覚ましで目を覚ました・・・

「以外と良く眠れたな・・・さて行くか」

蒼馬は準備してから試験会場へと向かった

「失礼します！」

「失礼するなら帰ってきて」

「失礼しました！つて危ない・・危うく帰るところだった」

「ほほゝなかなかやるねゝさすが噂の蒼馬君や」

・・・戦闘準備をしている・・この人は駆動花蓮さん・・
無限の闇の異名を持つ魔法使い・・には見えない。

「今失礼なこと思ったやろ・・」

「いえ・・・思ってたません・・」

「まあええわ・・んじややりましょか」

「お願いします！」

こうして最後の試験・・空間の試験戦闘が始まった

「場所は空間地帯・・二人とも準備はいい？・・・スタート！」

「先手必勝や！」

「虚空の闇 彼方より来るわ

殺戮の闇 無限の力 ここに集え！」

インフィニッターク
「無限の闇」！！

花蓮が魔法を唱えると黒い巨大な球体が
姿を現した・・・。

「行け！暗黒の枝！！」

花蓮が言つと球体から枝のような鋭い物が大量に
こちらに向かってきた・・・。

「こつちだつて・・・紅鳳凰波！」

「ほほゝそれが紅桜蒼天流っちゅうやつか」

鳳凰波で枝を相殺しこちらも反撃

「蒼狼天一閃！！」

「甘いで！虚空の壁！！」

花蓮が言つと黒い壁が現れ俺の攻撃を
防いだ・・・。

「行くで！ささつと終わらせたる！」

「混沌より来たれ 無限の闇

万事を破壊する 絶望の闇と破滅の空間
すべてを飲み込め！」

インフィニット ダークネス
「無限と虚空の闇」！！

・・・凄い大きさの黒い球体が現れた・・・
さきほどよりも大きく・・・威圧感が凄い

（空馬！ユニゾン！行くぞ！）

（OKマスター！！）

（ユニゾン！）

「それがユニゾンっちゅうやつかな？」

「ああ・・・行くぞ！」

「蒼龍天王斬！！」

蒼い龍が花蓮に向かって飛んでいく
どうでる・・・？

「それくらいで倒せると思うか？・・・いくで！」
ダークネスバスター
「混沌闇波動」！！

相殺された・・・あっけなく・・・強い。

「なら・・・蒼馬飛燕！！」
「甘いで空間転移！」

後ろに高速移動して斬ったと思ったが
花蓮は俺の後ろにいた・・・

「これで・・・しまいや！」
「な！？・・・」

クリスタルランサー
（空馬！「輝きを持つ変化結晶体」いけるか！？）
（準備OKです！）

「しまいや・・・ゼロ虚空の闇の破壊」！

ドゴーン！！

巨大な黒い球体は爆発と同時に大量の槍のような物を
飛ばした・・・

「ふゝこれでどうかな？・・・な！？」
「気を抜くのは速い・・・紅風車ゝ疾風！」

「さすがやな・・・虚空の壁！」

相殺された・・・さすが花蓮さん・・・噂のほどはある。

「行くぞ！蒼影残像！」

「な！？なんや・・・これ・・・分身の術かいな？」

蒼影残像は高速で動くことにより大量の残像を作り出し
相手を惑わす技

「・・・甘いわ・・・全闇消滅！」

「な・・・に・・・？」

花蓮の周囲から黒い礫が飛んできた・・・

さすがに回避出来ず直撃・・・

「回避失敗か・・・残念やな・・・終わりや！」

「まだだ！フルユニゾン！！」

「！！それが・・・フルユニゾンか・・・見た目かつこええやん」

「これが身体能力の極限まで高めるユニゾンだ」

武器へのフルユニゾンとは違い身体能力を

極限にまで高めることが出来る

「蒼馬飛燕！」

「！はい・・・虚空の壁！・・・え？」

蒼馬は後ろに回りこんで斬ろうとしたにのを防ごうとした花蓮だ
ったが

後ろにいた蒼馬は・・・残像だった

「しまった！」

「くらえ！紅白虎逆鱗！！」

「！？間に合わへん！」

ドゴォーーン！

刀に紅の魔力を纏わせ全身全霊の力で両断

「・・・次元の使い・・・恐ろしいもんや・・・でも・・・まだや！」
「なに！？」

今ので決着が着いたと思ったが・・・
花蓮の持っている本から黒い魔力が・・・溢れ出す！！

「これが必殺技ってやつや・・・受けてみ！」

「銀河の闇 虚空の彼方へ
汝を消滅させ 永遠の闇の糧となれ！」

ユニバース オフ・ザ・ダークネス
「銀河の永遠闇」！！

！！！！！！

有紗のシューティングスターブレイカーよりの凄く
何と言うまがましいオーラの波動・・・。

「これでとどめや！！」

「まだだ！紅守天絶光！」

ピーーーーン！！

もの凄い衝撃波と黒い爆風・

「はぁ・・・はぁ・・・これなら・・・！」

「・・・まだ・・・だ」

「う！うそやろ？不死身か！？」

紅守天絶光

紅桜蒼天流の守備技 強大な一撃から
刀から出されるオーラと斬撃を放ち防御する技

「・・・やりおるわ・・・」

「こちらの番だ・・・行くぞ！」

「蒼龍天王斬！！」

ドゴオーン

・・・勝負はついた・・・

「しょ・・・勝者 井上蒼馬君！！」

こうして3つの試験戦闘を終えたのだった・・・

第八話 空間と無限の闇（後書き）

作者「お疲れ様・・・」

蒼馬「どうした・・・疲れてるのか？」

作者「深夜の更新が多くて・・・ね」

蒼馬「まあ頑張れ」

作者「うん・・・頑張る！」

作者「それでは！」

作者「ご感想ありがとうございましたm・・・m」

作者「皆様からのご感想待ってますmーmm」

作者「誤字だらけの駄文ですが・・・」

作者「次回もよろしくです」

第九話 練習試合（前書き）

試験をすべて終えすべて合格と言つ完璧な結果で合格した蒼馬
空間管理局入隊当日

管理局の剣士と試合することになるうとは・・・。

第九話 練習試合

3の試験を終えた翌日

蒼馬はアレックスに呼び出されていた・・・

「まずは合格おめでとう」

「ありがとうございます・・・で入隊するんですか？」

「ええ・・・陸空戦士になってもらいます」

陸空戦士

陸部隊と空部隊 両方の部隊の戦闘員

「はあ・・・フェルガと有紗の部隊ですか？」

「ええ そうよ頑張ってね！」

「はい！今度ともよろしくお願いします」

会議室を出た・・・扉を開けると女の人がいた・・・

「お前が井上蒼馬か？」

「あ・・・はい・・・そうですけど」

「とても強い剣士らしいな・・・」

「いえ・・・言うほどの実力ありませんよ」

いきなり話しかけられて剣士？と聞かれて

蒼馬は少し焦っていた・・・。

（なんだ？この人？知ってるか？空馬）

（烈風の剣士エコーズさんです・・・かなりの実力者です）

（剣士か・・・まさか）

「私と戦ってくれ！頼む！」
「……………」

（やっぱりか……………）

こうして断ることも出来ず…………エコーズと
練習戦闘することになったのだ…………

「ではルールは試験と同じ…………いいか？」

「はい お願いします」

「では…………いくぞ！！」

言つとエコーズは剣を鞘から抜いて突進
してきた…………速い！

「速い！紅鳳凰波！！」

「甘い！烈火豪衝！」

お互いの衝撃波が激突…………お互い凄い威力だ
エコーズが仕掛けてきた

「震裂凍破斬！！」

「くっ！紅時空両断！！」

お互いの剣技の打ち合い…………
エコーズのほうが実力は上…………だが！

（ユニゾンだ！いけるか？）

（OKマスター…………ユニゾン！！）

「ほゝそれが噂のユニゾンか・・・こい！」

「ああ・・・いくぞ・・・蒼馬飛燕！」

エコーズの後ろに来た・・・しかし！

「甘い！怒涛爆砕！」

「なに！？がはあ！」

エコーズの怒涛爆砕・・・なんというカウンター攻撃だ・
蒼馬は回避もできず直撃した・・・

「はあ・・・はあ・・・さすが・・・」

「まだだ！いくぞ！」

「くっ！やられてばかりだと思っなよ！」

「蒼狼天・・・」

「裂風我・・・」

「「一閃！！！」」

お互いの一閃が激闘・・・

剣と剣との戦い・・・蒼馬は試験以上に苦戦していた・・・

（フルユニゾン・・・いくぞー！！）

（OKマスター！！フルユニゾン！！）

「それが・・・フルユニゾンと言うやつか・・・なかなかの剣だな・

・
「^{ゼノン}紅蒼に輝く^{フォース}夜天の刃」！！

お互いが・・・しかけた！

「蒼龍天王斬！」

「斬魔烈火閃！」

ズバーーン！！

お互いの技がぶつかり合い相殺・・・
まだ終わらぬ剣技の打ち合い・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・やるな蒼馬・・・」

「エコーズこそ・・・だけど・・・次で・・・きめる！」

「こちらこそだ！！」

エコーズの武器が変化した・・・大剣に近い剣・・・
大きくなったのだ・・・

「烈火爆砕・・・霸王斬滅剣！！」

もの凄い斬撃は地面をつたって飛んでくる・・・
速い・・・

「こっちに來て考えた・・・必殺技だ・・・」

（マスター危険です！あの技はマスターの魔力のほとんどを！）
（あれ以外に霸王斬滅剣を止める技は無い・・・いくぞ！！）

蒼馬は片手で持っている刀を両手で持って構えた・・・

すると・・・刀に魔力が纏って剣みたいになったのだ・・・
魔力が凄く速さでたまって輝いている・・・

「エクス絶対勝利の剣」！！！！

「な・・・なに！あれは！」

エコーズの放った霸王斬滅剣をも打ち貫き・・・
伸びるような輝く剣・・・エコーズに向かっていった・・・

ドゴーーーーン！！！！

「・・・あれが・・・エクス絶対勝利の剣か・・・カリバー見事」
「はぁ・・・はぁ・・・俺もダメだ・・・」

こうして戦闘は終了した・・・
蒼馬の勝利の終わったのだった・・・

第九話 練習試合（後書き）

作者「蒼馬君強すぎでしょww」

蒼馬「兄貴より弱いけどな・・・」

作者「エクスカリバーかつこいいねえw」

蒼馬「この技をどう出すかPCの前で悩んだもんな・・・」

作者「真のエクスカリバー・・・」

蒼馬「何か言ったか？」

作者「なんにも無いですwそれでは」

作者「ご感想ありがとうございましたm・・・m」

作者「皆様からのご感想待ってます」

作者「ぜひ！次回も見てやってくださいm・・・m」

第十話 仲間達（前書き）

エコーズとの戦いにギリギリで勝利した蒼馬

今日はアレックスの呼び出しで

今後任務をともにする仲間達の紹介があるらしいので
会議室に向かっていた・・。

第十話 仲間達

エコーズとの戦闘から2時間・・・

アレックスに呼び出された蒼馬は会議室に向かっていた

「失礼します！」

「失礼するなら帰ってきて」

「失礼しました・・・って花蓮・・・2度目だぞ・・・」

「ほほ、2回目も帰らなかったとは・・・蒼馬君さすがやほ」

失礼しますネタが終了し会議室を見渡してみる・・・
知らない人が数人立っていた・・・

「蒼馬君あなたの試験結果でました・・・発表しますね」

「あ！はい・・・お願いします」

井上蒼馬 試験結果

ランク A A A L v 4 魔力値Bクラス 陸空戦士

陸A + 空A 空間B + ...の結果だった・・・

「・・・さすが蒼馬やわ・・・」

「私より・・・すごいかも・・・」

「あはは、さすが蒼馬君・・・」

周りは驚きの顔をしている・・・凄い結果らしい

「さきほども言ったように陸空部隊に入隊してもらいます

「はい！お願いします」

「部隊の仲間を紹介しますね」

陸空部隊・・・メンバー紹介

「さきほども剣を交えたが・・・エコーズだ、よろしく頼む」

「あ！エコーズと同じ部隊なのか・・・」

エコーズ ランクA A A L V 4 魔力地Bクラス

陸A A + 空B B 空間B 武器 霸王魔剣

「獄衣司です お願いします！」

「ああ・・・よろしく」

獄衣司 ランクB B B + L V 3 魔力値B +

陸B B 空A 空間B 武器 イノダイマー （回復 補助系）

「フォーマルトです・・・よろしく・・・」

「こちらこそ・・・よろしく」

フォーマルト ランクA 魔力値A

陸B B 空A 空間C 武器 イーグルバスター

「今いるのはこの3名よ今後はエコーズさんと任務が多いでしょう」

「そういうことだ蒼馬・・・よろしく頼む」

「エコーズ見たいな強い人とで、よかった・・・」

蒼馬はエコーズとで安心していた・・・

「陸空戦士は陸部隊 空部隊の補佐だから有紗達も多いわよ」

「よろしくね、蒼馬君」

「ああ・・・よろしく」

こうして部隊編成も発表され蒼馬にも自由な時間が出来た・
しかし！

「蒼馬君いるか？」

「蒼馬いる？」

有紗と花蓮が部屋にきた・・・。

「いるけど・・・何のようだ？」

「今から武器持って練習戦闘部屋にきてね」

「え？・・・」

一瞬思考回路が停止した・・・

「蒼馬君待ってるよ」

（マスター生きてますか？）

（俺・・・死ぬのかな？）

（まあ行ってみましょ・・・）

こうして蒼馬練習部屋へと向かったのだった・・・

練習部屋には 有紗 フェルガ 花蓮 エコーズ アレックス
フォーマルトがいた

「さきほど見せたあの技・・・もう一度いいか？」

「最後にやったやつか？」

「ああ・・・頼む！」

「……死ぬかも……」

皆が期待の眼差しでこちらを見つめる
やるしか無いか……

（空馬……一回だけやるぞ……）

（一回しか撃てませんよ……）

（だな……フルユニゾン!!）

（OKマスター……フルユニゾン!!）

「紅蒼に輝く夜天の刃」!!
ゼノン フォース

「……やるか……」

「蒼馬君頑張つて」

蒼馬が刀を上上げて魔力を溜め始めた……

「いくぞ!!」

皆が一斉に唾を飲む……

「絶対勝利の剣」!!!
エクス カリバー

ズバァアーーーーン!

光輝く剣は伸びていき……目の前の城壁つばいのを真つ二つに破壊した……

「……すごい……私達3人の必殺技でやっと破壊できる城壁を」

「一人で破壊しおつた……仰天やわ……」

「……さきほどより……強くないか?」

さきほどの「絶対勝利の剣」より魔力をたくさん纏わせ放った蒼馬のほとんどの魔力を消費したのだ・・・。

「蒼馬君あれは「神技」しんぎよ……」

「神技？なんですか・・それ？」

「この世でもっとも強い技の種類よ……」

蒼馬の思考回路停止その2・・・

「ええええええええええ！！！」

「すごいは……さすがね……ただ者じゃないわ……」

「そんな凄い技だったなんて・・・思いつきだったのに・・・」

神技

この世に多数あり．．．とてつもない威力を誇ると言われる
 使える者は少ない．．．

「ありがとう蒼馬君・疲れたでしょ？もういいわよ」
「そうですか・・・では」

こうして蒼馬は部屋に戻った・・・

「まさか……あれほどだなんて……」

「エコーズ……どう思うっ?」

「まだまだ伸びるな．．．脅威だな．．．」

第十話 仲間達（後書き）

作者「エクスカリバー」

蒼馬「お気に入りみたいだな・・・」

作者「YESゲームとかでもかつこいいしね」

蒼馬「次回から任務ってやつか？」

作者「そうだね有紗との任務だね頑張って」

蒼馬「ああ・・・」

作者「真のエクスカリバー完成も・・・」

蒼馬「ん？なんだ？」

作者「いや・・・まあ頑張ってたね」

蒼馬「ああ・・・お前のほうが頑張れよ・・・」

作者「はい・・・それでは」

作者「ご感想ありがとうございましたm・・・m」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm・・・m」

作者「次回も見てやってくださいm・・・m」

第十一話 初任務 雪牙竜 ペルガトリオン（前書き）

神技を習得していた蒼馬

今日は有紗との初任務・・・。

うまくいくのだろうか？

第十一話 初任務 雪牙竜 ペルガトリオン

「蒼馬と有紗・・・今から任務に行ってもらおう」

「分かりました・・・場所は？」

「黒金雪山だ・・・」

「分かりました！準備の出来次第出発します！」

こんな感じで俺と有紗の初任務はスタートしたのだった・・・。

「蒼馬君と任務 楽しみだ」

「まあ頑張るか・・・」

今回は討伐任務 討伐対象はペルガトリオン
雪牙竜と呼ばれている・・・らしい

「二人とも転移します。いいですか？」

「はい！」

こうして初任務スタートしたのだった・・・。

「ううーけっこう寒いな・・・」

「冷えるねーさて早く終わらせよ」

「ああ・・・」

俺と有紗は山洞窟の奥のほうへと進んでいた・・・

「今にも出てきそうだな・・・」

「ストリームバスター探索スタート!」

「OKマスター」

:

:

:

「マスター発見しました この100m奥です」

「了解!行こう蒼馬君!」

「ああ・・・」

俺達は奥へと走った・・・寝てやがる・・・。

「おやすみ中だね」

「寝ている間に倒すか・・・」

「そうだね!行くよ!」

その時だった・・・

「ガアアアアア!」

「起きたか!」

「エクシードバスター!」

有紗の放ったエクシードバスターを回避し反撃してきた

「ガアアアア!」

「雪のプレス!?ディフェンドバリア!」

ペルガトリオンの放ったプレスは弾かれたが
周囲が凍てついている・・・

「紅風車」疾風!」

「ランドシュート！」

二人の攻撃も簡単に回避される
ペルガトリオンが口に魔力を溜め始めた・・・

「危険だよ蒼馬君！逃げよう！」

「いや・・・いける！ユニゾン！」

「ガアアアアアア！」

ペルガトリオンの口からブレス・・・先ほどより
とっても魔力値が濃く当たって無くて寒い

「蒼龍天王斬！」

ドゴーーーーン！

なんとか相殺されたがペルガトリオンが突進してきた

「くう！？紅鳳凰波！」

「エクシードバスター！」

二人の技により吹き飛ばされるペルガトリオン
しかし まだ余裕のかのように突進してくる・・・

「蒼狼天一閃！」

難なく回避された・・・速いな・・・

「タイプ！グレイナル！アクセルストーム！」

有紗の高速突進さすがに反応出来ず直撃・・・しかし！

「ガアアア！」

ペルガトリオンの尻尾のなぎ払いが
有紗に直撃

「きゃあ！」

「くそ！紅風車！天魔！！」

紅風車！天魔

抜刀の斬撃がどんどん増えていく最大10個の斬撃になる

さすがに対処しきれないペルガトリオンに直撃
怒ってしまったようだ・・・

「有紗！いけるか？」

「うん！行くよ！シューティングスター・・・」

「蒼龍天・・・」

「ガアアアアア！！」

怒りに我を忘れ突進してくるペルガトリオン

「ブレイカー！！」

「王斬！！」

二人の技は直撃しペルガトリオンは灰となって消えた・・・

「任務完了だね お疲れ様」

「ああ・・・お疲れ様」

（マスター上から反応です！」

（なに！？」

「鋼落とし！！」

「有紗避ける！」

俺と有紗はギリギリ回避に成功し
無事だった・・・

「な、なに、貴方は誰なの？」

「貴方達を殺す者です・・・鉄の雨！」

「くそ！紅風車！疾風！」

相手の技と相殺したが・・・相手はさらに攻撃してくる

「銅の剣撃！」

「エクシードバスター！」

ドゴーン！

再び相殺・・・

「井上蒼馬・・・あなたを排除します」

「俺か！？恨みを買った覚えは無いのだが・・・」
「死んでもらいます！」

（フルユニゾンだ！いくぞ！）

（OKマスター・・・フルユニゾン！）

「紅蒼^{ゼノン}に輝く夜天^{フォース}の刃」

「それが・・・行きます！鉄の雨！」

「紅鳳凰波！」

再び相殺・・・相手の剣に魔力が纏い始める

「時間が無いのです・・・死んでもらいます！」

「そう簡単に死ぬものか！」

「悪夢の十字架！！」

「蒼龍天王斬！！」

お互いの強力な技がぶつかり合い相殺

「まだだ！」

相手が突進しようとしたとき・・・。

「エクシードバスター！」

「なに！？だが・・・甘い地獄の鎖！」

「きゃあ！？」

有紗は赤い色の鎖に拘束されてしまった・・・

「それは私の魔力が尽きるか私が死なないと解除されません」

「貴様・・・蒼烈火獣天！」

連乱撃を放つが回避され・・・相手の反撃

「これで終わりです！悪夢の十字架！」

相手の必殺技・・・回避に成功し・・・気づいた

（マスターあの技の後相手に隙ができます！）

（わかった！行くぞ！）

蒼馬は刀に魔力を溜めながら相手に向かって突進した

「甘いですね！突進するとは命を捨てにきましたか！」

「・・・試してみるか？」

「ふん！いいでしょう！悪夢の十字架！」

蒼馬は紙一重で回避し魔力を最大まで溜め
相手に急接近した・・・

「何！？回避されただと！？」

「これで・・・終わりだ・・・」

最大まで魔力を溜めた刀を振りおろす！

「絶対勝利の剣<sup>エクス
カリバー</sup>」！！！！

「これは！？ガハア！！！」

光輝く伸びる剣が相手の腕を切り落とした・・・

「く！くそ！撤退だ！鉄の雨！」

「な！？紅鳳凰波！」

ドゴーン！

相手は相殺された時の煙が出ると同時に逃げて行った
有紗の拘束も解除された・・・

「大丈夫か？有紗？」

「う、うん、ありがとう・・・本部に戻って連絡しなきゃ」

「ああ・・・戻るか・・・」

こうして俺と有紗の初任務は幕を閉じた・・・。

第十一話 初任務 雪牙竜 ペルガトリオン（後書き）

作者「任務には危険が付き物さ！」

蒼馬「……………」

作者「お疲れ様です m - - m」

蒼馬「序盤……急展開すぎないか？」

作者「……………m - - m」

蒼馬「エクスカリバー！！！」

作者「ギヤアアアアアア！！！！！」

蒼馬「まあ馬鹿をほつといて………」

蒼馬「ご感想ありがとうございます」

蒼馬「皆様からの評価とご感想待ってます」

作者「次回も見てやってください！ m - - m」

蒼馬「生きてたのか……………」

第十二話 エクスカリバー（前書き）

初任務を無事終了し任務成功した蒼馬と有紗
アレックスから休暇をもらい休む日になるはず
だったのだが・・・

第十二話 エクスカリバー

「君達、今日は休暇だ休んでいいよ」

「「「「やっただけ!」」」」

俺や有紗、フェルガ、花蓮は大喜び

「蒼馬君、遊びに行こうよ」

「ん、悪いけど無理だ」

「え、なんで」

「ん、ちよつとな」

数日前「絶対勝利の剣^{エクスカリバー}」を見せたときに
アレックスに言われた・・・

「その技は昔ある人物が使っていた技なんだ・・・」

「そ、そうなんですか・・・」

「その人はその技に魔力を乗せすぎ死んだ・・・」

「・・・そうなんですか」

「君も改良しないと・・・死ぬぞ」

こうして俺は新たなエクスカリバー習得のため
訓練所で修行することにした・・・

「なら私達も付き合うよ」

「え? いいよ、せっかくの休暇だし・・・」

「そないなこと言わずにな、ええやん付き合ってたって」

「まあいいけど・・・」

こうして俺達は真エクスカリバーの習得の向けて練習することにした……。

「どんな感じのにするの？」

「んゝイメージでは剣の形を保ったのをやりたいな」と

今の俺の「絶対勝利の剣」^{エクス}_{カリバー}は
魔力を溜めて輝く剣を前に伸ばし両断する技

「蒼馬がイメージしてるのは少し伸ばして剣の形を保つことやる？」
「そうのことだ」

こうして真エクスカリバー習得に向けて練習が始まった

「フルユニゾン!!」

花蓮が何かを唱え始めた……

「パイダステイン！」

その瞬間俺の体は黄色い光に包まれた

「これが包んでる間は魔力が凄い速さで回復してくのよ」

「ありがとうな花蓮助かるよ」

「お礼言われるほどのことじゃ……（／／／）」

「んじゃやるか……」

意識を剣の形の集中……

「エクス
カリバー絶対勝利の剣!!!」

剣が伸びた・・・成功か？

「凄い！成功したよ」

「いや・・・まだだ・・・」

俺は剣を振ってみる・・・剣が伸びてしまった

「くそ！・・・」

剣が伸びずそのままの形で保たなければいけない・・・
魔力コントロールと集中力が必要だな・・・

（マスター2分休憩すれば行けます）

（OK・・・んじゃ休憩だ・・・）

「よし休憩だ・・・」

「え？速くない？」

「けっこう魔力を消費するからな・・・」

2分後また再開・・・。

「集中集中・・・いくぞ！」
エクス
カリバー
「絶対勝利の剣!!!」

また剣の形で保つことは出来た・・・問題は
振って形を維持できるかだ・・・

「頑張れ〜蒼馬〜」

「ああ・・・行くぞ！」

振ってみた・・・しかし剣が伸びていつてしまった

「くそ！」

これが3時間ほど続けられた・・・

「蒼馬君・・・ちよつといい？」

「ん？なんだ有紗？」

「ん〜なんて言えばいいのかな？蒼馬君は魔力を放出しすぎだから剣が伸びちゃうんだよ」

「そうなのか？・・・どうすれば・・・」

「魔力を放出しすぎず・・・固定って感じかな・・・」
「固定か・・・」

確かに・・・魔力を出しすぎてもいけない気がする

「蒼馬私からもいい？」

「ん？フェルガか・・・なんだ？」

「剣だけに魔力を纏わせてたらダメな気がするんだ・・・」

「剣だけじゃなく・・・全身ってことか？」

「うん・・・」

剣だけじゃなく全身に魔力を纏わせるか・・・

「蒼馬私からもええか？」

「花蓮からもか．．ああ頼む」

「コントロールや．．蒼馬は振るとき魔力のコントロールが出来てないんや」

「コントロールか．．ああ．．ありがとう」

魔力のコントロールか．．．

3人から言われたことを試してもう一度．．

「頑張れ〜蒼馬〜」

「ああ．．．行くぞ！」

全身の魔力を．．そして魔力を固定．．魔力コントロール！

「真・絶対勝利の魔剣^{エクス}カリバー^{カリバー}！！！」

ここまではいつも通りだ．．．後は．．．

俺は振ってみた．．．すると！

剣は伸びず斬撃のような剣が伸びただけだった．．．

「これは！？前のエクスカリバーを振ったときと同じ．．．」

「凄いや〜蒼馬振ったら前の技がでるなんて．．．」

「しかも剣の形を保ってるから何発も撃てる．．．」

「まあ俺の魔力じゃ〜この技は5回が限界だ．．普通に振るならいけるけど．．．」

俺は3人に近づいた．．．そして

「3人とも！ありがとう！アドバイスが無かったら無理だったよ」

「「え!?!」」

俺は3人に抱きついてた・・・

「そ、蒼馬君!・・・大胆だよ・・・(///)」

「お!おめでとう蒼馬・・・(///)」

「そ、蒼馬!大胆やわ・・・そういうところも・・・ええな・・・(///)」

こうして「真・絶対勝利の魔剣^{エクス}_{カリバー}」は完成し
その後各自の部屋で休んだ・・・

「ありがとう・・・3人とも・・・」

第十二話 エクスカリバー（後書き）

作者「おゝフラグっぽいのが・・・」

蒼馬「真技完成・・・試してやろうか？」

作者「すいませんでした！」

蒼馬「これで戦闘も少しは楽になるかな」

作者「蒼馬君の取り合いは楽になりそうじゃないね・・・」

蒼馬「ん？なんだって？」

作者「なんでもない！それでは」

作者「ご感想ありがとうございますm・・・m」

作者「皆様からの評価&ご感想待ってます」

作者「次回も見てくださいm・・・m」

第十三話 神召還者（前書き）

新しい技を完成させて休暇を楽しむ蒼馬
しかし 魔物の反応があるとわれ
そこに向かう蒼馬とエコーズだった・・・。

第十三話 神召還者

「この辺りだったな・・・」

「そうですね・・・上か!？」

「ほお、バレたか・・・」

「開始早々戦闘ですか・・・」

敵は鎧見たいな感じのを纏っている
武者だ・・・。

「我が名は武鎧ヨガミ・・・ベル様の召還獣」

「ベルの!？」

「ああ・・・死んでもらう!」

「行くぞ!蒼馬!!」

相手はこちらの様子を探ってるかの様な動き
2：1有利のはずだ・・・

「烈火豪衝!!」

「武我剣聖・・・」

ドゴーン!

お互いの技は相殺されたがヨガミの技のほう
上に感じた・・・。

「紅風車、疾風!」

「裂風我一閃!!」

「破邪断刃・・・」

ヨガミの技と俺達二人の技は相殺・・・2：1なのに・・・

「蒼馬！来るぞ！」

「焰鵬鶴舞踊！」

「くう！蒼龍天王斬！！」

激しい技の打ち合い・・・お互い魔力を少しずつ消費していくが
ヨガミに疲れの表情は見えない・・・

「もう飽きた・・・死ね！」

「貴様がな！斬魔烈火閃！」

「紅鳳凰波！」

ドゴオーーーン！

二人の技はヨガミに当たったかと思っただが・・・。

「甘い・・・断空蘭斬破・・・」

「な！？後ろだと・・・くそ！」

「な！？エコーズ！」

ヨガミは後ろに回り込みエコーズを攻撃

エコーズは直撃を食らったが気絶はしていない

「まだまだ！烈火爆碎・・・霸王斬滅剣！！」

「なに！？ガアア！？」

エコーズの霸王斬滅剣が直撃したが・・・

「く・・・貴様ら如きが・・・我一撃を・・・」

「蒼馬・・・少し休む・・・頼むぞ」
「ああ・・・任せろ」

エコーズは下にゆっくりと落ちていき1:1
しかしヨガミは技を直撃でくらった・・・いける！

「行くぞ！フルユニゾン！」
「く・・・本気か・・・」
「ああ・・・試させてもらっぞ」

実戦では初めてだが・・・やるか
魔力を全身に・・・固定・・・コントロール！

「真・絶対勝利の魔剣！！」
「なに！？神技か！？」
「おおおおお！！！！」

ヨガミの向かって突進して斬りつける
ヨガミは回避するが斬撃から剣が伸び直撃

「な・・・に！？バカな！」
「これで・・・終わりだ！」

両手で持った「真・絶対勝利の魔剣」で両断
ヨガミの体力で回避出来ず真つ二つになった・・・

「ふう～やったか・・・」
「合格だよ・・・蒼馬君・・・」
「この声は・・・ベルか！？」
「大正解」

俺の後ろにベルが立っていた・・・

「また戦いにきたのか？・・・」

「違うよ、合格発表しにきたんだよ」

「ふざけるなら斬るぞ・・・」

「エ、エコーズ説明してあげて・・・」

エコーズの名前を知っている？

仲間なのか？

「蒼馬・・・ベルは空間管理局の仲間だ・・・」

「え！？でもあの時襲ってきたじゃないか」

「蒼馬君の次元の使いとしての実力を試したんだよ・・・」

俺の実力を試す？なんでだ・・・

「前回の次元の使いはベルと共に行動していたが・・・」

「実力の無さあまり戦死したんだよ・・・」

「・・・」

戦死しない程度の実力が無いのか調べたのか・・・

「でも蒼馬君強いね・・・これなら奴らに勝てそうだね」

「ああ・・・さすがだな」

「奴ら・・・誰だそれ？」

「時が来れば・・・分かるよ・・・」

こうしてベルが仲間だって分かって複雑な気持ちになりながら
本局へ戻る3人だった・・・

第十三話 神召還者（後書き）

作者「お疲れ様〜蒼馬君」

蒼馬「まさか・・・ベルが仲間だったなんて・・・」

ベル「僕まあ強いから大丈夫だよ〜大抵は一人行動だし」

作者「ゲストのベル君です」

ベル「こんちワワ〜ベルです」

蒼馬「奴らって誰だ・・・？」

ベル「蒼馬君強いよね〜神技使えるし・・・」

蒼馬「お前も使えるんだろ・・・どうせ」

ベル「まあ〜ね・・・」

作者「今日はここまで・・・それでは！」

作者「ご感想ありがとうございましたm・・・m」

作者「皆様からの評価・感想アドバイスなど待ってますm・・・m」

作者「次回も見てくださいm・・・m」

第十四話 空間破壊者（前書き）

ベルが仲間だと言う事が判明し本局へ戻る

蒼馬とエコーズ ベルは単独行動が好きだと言いつつどこかへ消えた
本局へ戻った二人は任務完了

平和な一時を破壊する者が・・・

第十四話 空間破壊者

「お疲れ様二人とも休んでいいよ」

「蒼馬！私と戦って」

「断る！」

いきなりの戦闘申し込みを断って俺は
自分の部屋に戻った

「あゝ疲れた・・・あれ？花蓮か？」

「おゝ蒼馬はんゝおかえり」

「あ、ああゝただいま・・・ってなんで居るんだ？」

「ええやゝん別に居たって・・・」

何故か俺の部屋に花蓮がいた・・・なんでだ？

「まあ本当のこと言うとベルの言ってた奴らの正体を教えにきたん
よ」

「そうなのか・・・で？」

ベルが任務の最後のほうで言っていた・・・奴ら

「奴らつてのは空間破壊者のことよ」

「空間破壊者？」

空間破壊者

本局最大の敵で次元・・・空間を破壊しこの世の秩序を破壊を試
みている

チームのような集団があり けっこうな数があるそうだ

「って感じやわ」

「え？今の説明だったのか・・・まあいいや」

「まあ私たちの目的は空間破壊者をいなくすることなんよ」

「大変そうだな・・・まあ俺もやらなきゃな」

空間破壊者の残滅・・・実力はけっこうあるそんな集団だからベルは俺の実力を試していたのか・・・

「ああゝ眠いな・・・」

「もう寝るんか？早いな」

時間はまだ午後7時・・・早すぎるが眠い

時計を確認した後睡魔に襲われ意識が消えていった

枕じゃない柔らかい感じの感触がしたが・・・いいか

「そ、蒼馬はん・・・いきなり・・・まあええわ膝枕うちゅうやつや・・・」

そう言つと花蓮は蒼馬の頭を優しく撫でて
静にテレビを見ていた・・・

（ん？俺は寝てたのか・・・時間は・・・9時・・・2時間寝てたか）

「蒼馬はん・・・おはようさん」

「ん？おはよう・・・よく寝たなゝ」

「気持ちよゝゝ寝れたか？」

「うん・・・いつもより気持ちよく寝れた気がする」

何故か花蓮は顔を赤くしている・・・。

「膝枕やったんけど・・・どうやった？（ノノノ）」

「あゝ気持ちよかったよゝって膝枕なのか!？」

「そうだよゝやって欲しかったらいつでも言ってなゝ」

そう言つと花蓮は鼻歌を歌いながら部屋を出て行つた

（マスタゝ思考回路停止中ですか？気持ちいいならもう一度!って言えば・・・）

（空馬・・・空間破壊者の前にお前を・・・）

（調子乗ってました!すいません）

（マスタゝも罪な人間だ・・・）

俺は晩飯を食べに行き・・・また部屋に戻ると
何故か有紗がいた・・・

「蒼馬君・・・花蓮の膝枕気持ちよかつたんだね・・・」

「な!何故知ってるんだ？」

「花蓮が自慢してきた・・・」

「・・・・・・」

（有紗さん怖いです!黒いオーラが・・・）

（まだ死にたくない・・・）

「蒼馬いる?」

最悪のタイミングでフェルガがやってきた・・・

「蒼馬・・花蓮から聞いたよ・・・」

「お前もか・・・・」

二人が声を揃えて言った。

「私達に膝枕して（／／／）」

ん？何か違うような気がする・・・
して？・・・でも断れる雰囲気じゃない・・・いいか

「はい、分かりましたよ、お嬢様達・・・」

「やった」

こうして俺は二人を膝枕することになった・・・足痛い・・・。

「にやははゝ気持ち良すぎて・・・眠く・・・」

「んゝ眠いよ・・・」

二人は眠ってしまった・・・。

「はあゝまあいいか・・・まったく」

蒼馬はそう言って二人の頭を撫でて座った体勢で寝ることにした

三人が目覚めたのは1時間後蒼馬の足は痺れてる・・・
空気を読まず警報が・・・

「空間破壊者出現 陸・空部隊出動」

「行くか・・・二人とも行くぞ！」

「うん！」

俺達は空間破壊者に居るポイントに向かった各自分かれて行動
俺の向かったポイントに一人の怪しいフードの男がいた・・・

「管理局か・・・潰す！」

「お前が潰れる！」

このセリフ的に空間破壊者が・・・

「黒火弾！」

「紅風車→飛燕！」

黒い火の弾と俺の斬撃は相殺されず斬撃が
火を弾を切り裂いた・・・弱いのかこいつ？

「メンガボルト！！！」

「紅鳳凰波！」

ドゴーーン！！

雷と衝撃波は相殺され破壊者は次の攻撃にはいるが・・・

「蒼馬飛燕・・・」

「な？なに！？」

背後に現れた俺の攻撃に反応出来ず直撃・・・けっこう弱いな
言っほどの実力も無かった感じだ

「くそ！空間召還！ゴブリンナイト！」

そう言うとき空間破壊者の体は消えて
鬼みtain騎士が現れた・・・

空間召還

モンスターを召還しシンクロすることで
モンスターの意識をのっとり同化することが出来る
モンスターが死ぬと本人も死ぬ

「ふふふ・・・死ぬ！！」

「蒼狼天一閃！」

突進してきたモンスターを切り裂くが
本体は斬れず盾が斬れた

「は、速いな・・・くそ！」

「雑魚に用は無いんだ！蒼龍天王斬！」

「な！グアアア！」

モンスターは蒼き龍の斬撃によって消滅・・・
モンスターが消滅したことにより本人も消滅した・・・

「蒼馬はん大丈夫か？敵は全滅やお疲れ様」

「ああ・・・戻るか・・・」

こうして空間破壊者との最初の戦闘は終了し
本局へ帰還した蒼馬だった・・・

第十四話 空間破壊者（後書き）

作者「蒼馬君ばかり・・・罪な野郎だ！」

蒼馬「蒼龍天王斬！！」

作者「ギアアアア・・・」

蒼馬「逝ったか・・・」

蒼馬「まあ俺が終わらせるか・・・」

作者「まだだ！逝ってないぞ！」

蒼馬「まだ生きてたか・・・まあいいや」

作者「いいんだ・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・ご感想・アドバイスなど待ってますm - - m」

作者「次回も見てくださいm - - m」

第十五話 破壊者 王我（前書き）

見事空間破壊者の撃退に成功した蒼馬達
空間破壊グループ王の手下らしい
最近活発に動いているグループ王
蒼馬とベルが上空を搜索していると
王我と名乗る奴が現れた！！！！

第十五話 破壊者 王我

「お前が次元の使いつて奴か・・・」

「なんで知ってる!？」

「王我君か・・・空間破壊者だよ」

王我 道

空間破壊グループ王のリーダー ランクス

武器 手袋つぱいの 見た目・・・金髪のスー サイヤ人みたい

「空間破壊者か・・・なら!」

「貴様が勝てると思うなよ」

「僕も一応居るけども・・・」

ベルは観客になるらしい・・・

蒼馬VS王我の戦い

「開始早々戦闘パート2か・・・」

「何無駄事言っている・・・行くぞ!」

王我に武器は見られない・・・素手か?魔法か?

「獅子爆拳!」

「紅風車」天魔!」

拳の戦いか!蒼馬は刀だが王我は魔法使うこと無く
接近戦で挑んでくる

「甘い・・・獣咆哮撃!」

「蒼虎死合！」

拳を突き出す拳圧と刀を振って出来る風圧の
ぶつかり合い・・・

「ほゝ少しは齒ごたえあるか・・・」

「まだ肩慣らしだろ！？ユニゾン！」

「調子に乗るのも今のうちだな・・・」

そう言つと王我が黄色い魔力を体に纏わせた
・・・完全にスー　サイ　人だ・・・

「奉天波動！」

「蒼狼天一閃！！」

激しい技の打ち合い・・・

王我にはまだ余裕の表情が見られる・・・余裕なのか？

「ふ！どうした鈍っているぞ・・・獅子惨天拳！」

「舐めるなよ！蒼龍天王斬！」

ドゴーーン！！

「ほほゝまあまあだな・・・朱雀撃波弾！」

「くっ！紅鳳凰波！」

相殺・・・相殺・・・互いの技は相殺されていくばかり
しかし・・・王我がしかけた

「ふ！もう飽きた・・・堅守獅子拳」

「な！？速い・・・フルユニゾン！！」

とっさの判断でフルユニゾン

「ほゝそれが・・・」

「ゼノン紅蒼に輝く夜天の刃！！」

「なかなかだな・・・だが！」

王我が言つと目の前から消えた・・・
速い動きに蒼馬に一瞬隙が生じた・・・

「ふ！神技の中の神技を見せてやろう・・・」
「な！？」

王我が王と呼ばれる異名の元になった技

「キングダム ブレイク武王の破壊撃」

「な！紅竜巻！」

王我が放った武王の破壊撃キングダム ブレイク「全身の

もの凄いオーラを纏わせ渾身の正拳突き・・・

紅竜巻で防御しきれず破壊され拳風で吹き飛んだ・・・

「ぐ！ガハア・・・くそ・・・」

「ふ・・・終わりだな・・・次元の使いよ・・・」

意識が・・・いや・・・しかし！

神技なら・・・神技で・・・いけるのか？

行くしかないと思つた蒼馬刀を両手に魔力を溜める

「^{キングダム}武王の破壊撃」！！
「^{エクス}真・絶対勝利の魔剣」！！！！

ドゴォー————ン！！！！

神技と神技のぶつかり合い・・・
しかし！長さのある蒼馬の攻撃が王我に直撃したが
王我は倒せず蒼馬を殴った・・・

「く！？・・・まだ生きてたか・・・」
「・・・ここまでやるとはな・・・面白い・・・」

そう言つと王我は背を向けてどこかへ飛んでいった

「強くなれ！俺を倒せるくらいの実力を身につけてから挑め！待っているぞ・・・」

「く・・・まだ勝てないか・・・」

消えそんな意識で王我の言葉を受けとった蒼馬
まだ自分では勝てないと再認識し
フラフラしながらも本局へ戻り

今日一日を振り返りながら眠ろうとしていた

（強かったな・・・俺も強くならないと）
（王我に勝てるようになれると思いますか？）
（ああ・・・いや・・・ならなきゃいけない）

俺がやらないで・・・誰が倒すんだ？
俺はあの人に勝ちたい・・・王我道に・・・

（「真・絶対勝利の魔剣^{エクスカリバー}」を過信しすぎたかな？）
（いえ・・・あの技は凄いです・・・他の技を磨きましよう）
（紅桜蒼天流・・・兄貴がいれば・・・いや・・・頑張ろう！）
（その意気です！マスター！）

王我道との戦闘で改めて自分の実力の無さに気づいた蒼馬
王我に勝つため気合を入れなおし
紅桜蒼天流に磨きをかけるのであった・・・

第十五話 破壊者 王我（後書き）

作者「蒼馬君頑張ってね」

蒼馬「お前も頑張れよ・・・」

作者「うん・・・頑張りますw」

蒼馬「兄貴の出番あるのか？」

作者「さあ〜分らないww」

蒼馬「まあ頑張って修行だ!!」

作者「そうだね!それでは!」

作者「皆様からの評価・ご感想アドバイスなど待ってますm・・m」

作者「次回も頑張ります」

第十六話 紅桜蒼天流（前書き）

王我との決戦から一週間

蒼馬は己を磨き技を磨き修行していた

周りから見れば急成長 自分から見ればまだ未熟

そんなとき空間破壊者が本局に向かってきていと言っ
連絡が来たのだ・・・

第十六話 紅桜蒼天流

「相手は一人・・・蒼馬・・・いけるか？」

「はい！」

「一応援軍は出す・・・無理はするな・・・」

「はい」

相手は空間破壊者一人

蒼馬一人で挑むことにした・・・何故敵は一人なのか・・・

「確か・・・この辺ってあれか・・・」

上空を漂う一人のフードを見つけた・・・

「井上蒼馬・・・だな？」

「だったらどうする？」

「始末する・・・」

「こっちのセリフだ！」

空間破壊者だった・・・

いきなり襲い掛かってくる破壊者

前回の奴をはLvが違う・・・

「紅風車と天魔！」

「バイススライン！」

相手の手が雷属性の棒っぱいのが飛んできた
天魔と相殺すると思ったが天魔のほうが強かった

「なに！？王我からの話ではこんな強さじゃ！？」

「余所見してる暇あるか？蒼馬飛燕！」

後ろからの不意打ち攻撃に反応出来ていない

破壊者・・・そのまま崩れ落ちる・・・

「ぐ！・・・まだだ・・・威綱！」

「紅鳳凰波！！」

今度は相殺された、相手は蒼馬の噂以上の実力に
少し驚いている・・・チャンスだ・・・

「ユンゾン！蒼龍天王斬！」

「くそ！空間召喚！・・・ゴーレム！！」

「なっ！？」

奴の空間召喚と言うセリフの瞬間に

巨大なまるでガ ダムのような・・・石像が現れた

「嘘だろ・・・」

「はくはっは・・・これがゴーレムだ死ね！！」

「くっ！」

巨大な拳から放たれるパンチ

これを喰らったら・・・考えたくない

（フルユニゾン！いくぞ！）

（OKマスター・・・フルユニゾン！）

「ほゝそれが噂の・・・」

「蒼狼天一閃！」

ゴーレムの腕は斬ったと思ったが・・・

「甘いんだよ！」

斬ったところが・・・再生していく

「嘘だろ・・・再生なんか出来るのかよ」

「貴様で勝てん！おらあ！」

「くっ！紅時空両断！」

斬っても斬っても再生していく・・・

「剣じゃ勝てないんだよ・・・」

「お前・・・紅桜蒼天流を舐めすぎだ・・・」

「なに！？」

紅桜蒼天流はどんま相手でも対処可能な剣術
相手が再生するなら・・・

「紅爆碎裂斬！」

「な！？」

ゴーレムの体に亀裂が入り・・・バラバラに碎け散った
これなら・・・

「甘いな・・・分離再生！」

「ちっまた再生かよ！」

ゴーレムはまた元の姿に戻っている

「言っただる貴様では勝てないと・・・」
「まだだ・・・紅鳳凰波！」

ゴーレムの体の岩が吹き飛んでいく・・・中心に何かる！？
核って感じのやつか・・・
蒼馬はそう判断した・・・

「これで終わりにしてやる・・・」
「再生するゴーレムを倒せると思うなよ！」

(出来ればやりたくなかったけど・・・)

蒼馬は刀に魔力を溜め・・・

「真・絶対勝利の魔剣^{エクス}！！^{カリバー}」
「神技か・・・再生する体は不滅だ！」

ゴーレムの体を縦に両断した・・・
体の中のオレンジっぽいのも斬れた

「な！？核に・・・気づいていたか・・・」
「ああ・・・終わりだ・・・」
「くっそ・・・」

ゴーレムは海に崩れ落ちていった・・・

空間破壊者を倒したて本局へ戻った蒼馬
疲れたので寝ようとしてたら・・・

「蒼馬はぐん遊びにきたで」

「花蓮か・・・どうしたんだ？」

「蒼馬の心の声が膝枕してぐって言ってるから来たんや」

「言ってますん・・・」

「・・・言った・・・」

なんか潤んだ可愛い顔でこちらを見られたら・・・

（マスターの選択肢は）

1 お願いします

2 よろしくお願いします

3 んじゃ頼む

・・・です

（拒否権無いのか・・・しょうがない）

「んじゃ花蓮・・・頼む」

「まかせないさ」

花蓮の膝枕で1時間ほど眠ることにした・・・

「可愛いな」蒼馬はん・・・」

「zzzz・・・」

その後眠気覚ましに有紗とフェルガに取調室で
1時間ほど何故かお説教を受けていた・・・

第十六話 紅桜蒼天流（後書き）

作者「・・・羨ましい」

蒼馬「蒼狼天一閃！」

作者「甘い！飛天 流 天翔 閃！」

蒼馬「なっ！？作者のくせに！」

作者「まあ邪魔な蒼馬君は置いて・・・3人にインタビュー」

有・フェ・花「「はい」「」

作者「蒼馬君をどう思いますか？」

有紗「強いし・・・かつこいいかな」（／／／）

フェルガ「戦ってる時・・・ボン！（／／／）」

花蓮「かつこええわ」（／／／）

作者「蒼馬君から告白してきたらどうしますか？」

有紗「え！？あゝその・・・OKです（／／／）」

フェルガ「え！？・・・ボン！！（／／／）」

花蓮「OKするわ（／＼／）」

作者「ありがとうございました・・・」

作者「蒼馬君斬首だね・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想・アドバイスなど待ってますm・・m」

作者「次回もよろしくです」

第十七話 神能力（前書き）

更新遅れてしまつて・・・
すいませんでした・・・m - m

王我を倒すべく修行中の蒼馬
いつもどおり修行を終え
寝ていたのだつた・・・

第十七話 神能力

「もしも〜し」

「・・・女神さん？」

寝たはずの蒼馬・・・

夢の中に女神様が現れたのだ・・・

「蒼馬君に力を与えたいと思います」

「いきなりですね・・・」

「気分です〜えい！」

女神様の手から光の玉が出てきて

俺の体に入ってしまった・・・

「あなたの創造通りの力・・・頑張ってくださいね」

「創造通りの力？なんですかそれ！？」

女神様は消えてゆき・・・

視界も・・・

（マスターマスター）

空馬の声で目を覚ました俺

夢での話しは真実なんだろうか・・・

（空馬・・・朝早いが練習行ってもいいか？）

（え？こんな早くからですか？）

（ああ・・・試したことがあるんだ・・・）

（そうですか・・・行きましょう）

蒼馬は女神様から貰った新能力を
解明&試すべく練習場所へ向かった

（創造する力か・・・俺の創造する通りの技が出るのか？）

創造する・・・自分で頭で思い浮かべた事が現実になる？
武器や技が出るのか？・・・やってみるか・・・

「んじゃ・・・エクスカリバーの名前の由来・・・」

蒼馬は頭の中で黄金に輝く剣を創造した・・・

「^{エクス}約束された勝利の剣^{カリバー}！！」

「^{エクス}約束された勝利の剣^{カリバー}」

湖の精から授かった、至上の聖剣。人々の「こうあつて欲しい」という願いが形と成った神造兵装であり、星の鍛えた「究極の幻想」。セイバーの使っていた宝具だ・・・

ズバァアーーーン！！

「本当に出来た・・・嘘だろ・・・アニメ」

出来てしまった・・・想像した通り・・・
頭の中で思い描いたアニメの技が出来るなんて・・・

（マスター凄いです！いつこんな技を！？）

（いや・・・）

武器を創造出来るのか？・・・
やってみるか・・・

「創造・・・来い！ロトの剣！」

伝説の勇者が使用していた剣・・・本当に
武器まで出せるなんて・・・

（マスター凄いです！）

（なんかチート戦士になった気分・・・）

蒼馬は創造した技・武器が使用可能・・・
まさにチート能力だ・・・

「一旦部屋に戻るか・・・」

今日は有紗との練習戦闘・・・
新能力を実戦で試す・・・いい機会だ

時は有紗との練習戦闘まで進み・・・

「蒼馬君！負けないよ！」

「こつちだって・・・負けない・・・」

「では・・・スタート!!」

新能力を試すか・・・有紗・・・すまん

「エクシードバスター!!」

「当たらないよ!」

エクシードバスターを難なく回避し・・・
構える・・・

「な!なにあれ?見たこと無いよ」

「秘剣・・・燕返し!」

アサシンの持つ唯一構えのある技多重次元屈折現象を応用し
全く異なる軌跡を描く三つの斬撃を同時に繰り出す技

「!?ディフェンドバリア!」

「その程度なら・・・破る!」

有紗の盾を燕返し of 斬撃が破壊・・・
有紗に直接的ダメージだ・・・

「きゃあ!・・・ううゝ強い・・・」

「まだだ・・・刀幻鏡!」

刀を地面に刺し無数の武器が地面から生えてくる技

「なにこれ!?くつ!アクセルストーム!」

「まだだ!武器創造・・・ロトの剣・・・ギガブレイク!!」

剣に魔力を纏わせ斬りつける技
アクセルストームと激突し・・・有紗が気絶した

「にやははる強い・・・」

「勝負あり！蒼馬君の勝ち！」

女神様から授かった力は・・・

とんでもなく強い力だった・・・

第十七話 神能力（後書き）

作者「蒼馬君が神になった……」

蒼馬「アニメ好きが……こんな能力を……」

作者「強すぎるね〜卑怯だ〜」

蒼馬「蒼龍天王斬!!」

作者「ガハア!……うう〜」

蒼馬「更新してなかったお前がホザクナ……」

作者「すいませんでしたm - - m」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「駄文ですが……次回もよろしくですm - - m」

外伝 蒼馬紹介（前書き）

蒼馬君とベルの現在の
能力と実力の紹介です。
十七話以降の能力値

外伝 蒼馬紹介

井上蒼馬 男 14歳 171cm

主な武器 長刀 紅蒼閃刀 短刀 狼蒼疾風+創造武具
紅桜蒼天流 九代目当主

現時点 魔力ランク SSS+ LV5 能力「クリエーター武技創造」
属性 炎&水 パートナー 空馬

普段の髪の毛の色は蒼色 ユニゾン後は紅色
瞳も髪の毛と同じ変化

最初の時点から創造能力を手に入れてチートな感じの力の持ち主
マイペースでアニメ好き 刀の手入れが趣味

「クリエーター武技創造」

能力持ち主の頭の中で創造した技・武器を作り出す技
オリジナル技・武器や知っている技・武器を作り出せる
しかし 蒼馬の魔力値以上の物は作り出せない
能力を使いすぎると頭痛が起きる
武器と技以外は作り出せない

ベル 男 年齢不明（蒼馬と同じぐらい） 174cm

主な武器 無し 生み出した武器を適当に使用 神召喚者
魔力ランク EX LV6 「アルマロス神物作成」
ファンタズナ・ドリームナ
「幻想と夢の扉」

髪の毛は黄金色 瞳は 紅色

気分屋でのんびり性格 実力はあるが戦う気が無い
神召喚者の称号を持つ

神召喚者

召喚者の頂点に立つものに与えられる称号
神をも召喚することが可能である（認められた神のみ）

「アルマロス 神物作成」

創造した物なら何でも作り出せる
物理法則も変える物も作り出せる 武器・技・生命体ナド作成可能
しかし能力値の凄い物を作り出すと自分へダメージが来る

「ファンタズナ・ドリームヤ 幻想と夢の扉」

空間移動 時限移動 錬金術 心理把握 覚醒が使用可能になる
この世界で上位に入るぐらい危険な能力である

外伝 蒼馬紹介（後書き）

作者「二人共チートじゃん……」

蒼馬「女神様最強なんじゃないか？」

作者「ああ、確かに……」

蒼馬「ベルの能力は反則だな」

作者「反則だね」

蒼馬「アニメの技有りって何でもありと同じような……」

作者「気にしないのさw」

作者「皆様からの評価・感想ナド待ってますm - - m」

作者「駄文ですが……次回もよろしくですm - - m」

第十八話 騎士の戦い（前書き）

武技創造能力を手にした蒼馬
有紗との練習戦闘で能力を試し
自分の能力の凄さを知った蒼馬
今日はエコーズとの戦闘だ・・・

第十八話 騎士の戦い

王我との決戦を残り一週間に控え
いつも以上に修行に熱を入れる蒼馬
今日烈風の剣士との二度目の戦いだ

「蒼馬！早くやるぞ！」

「もう少しぐらい・・・寝たかったな・・・」

朝早くから訪問し戦闘の申し込みをされた蒼馬
断ることも出来ず・・・

「ルールは前回と同じいいな！」

「ああ・・・はい」

「蒼馬君！頑張って！」

（マスター頑張りましたよう！）

（なんで・・・俺以外気合入ってるんだ？）

場所は陸の試験と同じ街ステージ
時間は無制限 気絶or魔力切れで終了

「では・・・いくぞ！」

「こっちだつて！」

先手必勝とばかり突進してくるエコーズ
甘い・・・

「紅風車！天魔！」

「烈火豪衝！」

「くっ！さすが・・・ユニゾン！」

「ほっもうユニゾンか・・・」

エコーズさん相手に手加減は出来ない

武技創造使うとしても苦戦・・・するかな・・・

「蒼龍天王斬！」

「震裂凍破斬！！」

「またも相殺・・・剣術は恐らくエコーズのほうが上
ならば・・・」

インビジブル・エア
「風王結界！」

幾重にも重なる空気の間が屈折率を変え、その対象を不可視のものとする

「な！？刀が・・・見えない！？」

ストライク・エア

「風王鉄槌！！」

「！？風か？・・・ガハア！」

打ち出した風がエコーズに直撃

刀が見えなくて油断したのか・・・

「くっ！烈風我一閃！」

「紅時空両断！！」

（マスター長距離攻撃は苦手ですか？）

（んっ接近戦しか・・・無理かも・・・やってみるか）

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ

焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

破道の三十一「赤火砲」しゃつかほう！！

エコーズに向かって火塊を放った
本当に出来た・・・

「くっ・・・その程度！斬魔烈火閃！」
「まだだ！雷法！」

エコーズは火塊を斬ったが雷法による
落雷を回避出来なかった

「ぐ！？・・・接近戦だけでは無いか・・・」
「馬鹿じゃありませんよ・・・！？」

エコーズの身にまとう覇気が・・・
いつもより威圧感が・・・凄い

「行くぞ・・・烈閃双陣」

エコーズの周囲に炎が・・・円のように
結界のような感じた・・・

「凄いですね・・・それ」
「まだ力を見せてないだろ・・・炎斬飛燕！」
「な！？紅風車」疾風！」

斬撃と斬撃のぶつかり合い・・・

しかし！エコーズの斬撃は止まることなく・・・

「くそ！？羅生門！！」

巨大な壁で斬撃を防ぐ・・・
しかし止まらない・・・

「さすがエコーズさん・・・ゲート・オブ・バビロン王の財宝」

持ち主の蔵と空間を繋げる能力を持つ。

王の財宝でそれらを空間を繋げて自在に取り出したり、射出することが出来る。

「天の鎖エルキドゥよ！」

「なっ！？鎖だと？」

神を律する黄金の鎖

エコーズは鎖に拘束され身動き出来ない・・・今だ

「蒼龍天王斬！」

「舐めるな！！覇気爆烈！！」

ドゴオoooooooooooo！！

「はぁ・・・はぁ・・・やるな・・・」

「さすが・・・エコーズさん破壊するなんて」

想像以上の実力だ・・・
だが・・・これで終わりだ

「行くぞ！・・・霸王斬滅剣！！」

「蒼王朱雀霸天斬！！！！」

蒼色に輝く朱雀を飛ばす技

ドゴーン！

「くっ・・・また負けたのか・・・」

「なんとか・・・勝ったか・・・」

エコーズの勝利後アレックスに呼ばれていた蒼馬

「君にそんな能力あったか？」

「女神様からいただいた能力です・・・」

「女神？まあよくわかんないけど・・・いいか」

適当な感じで会話は終了し・・・蒼馬は部屋に戻った

（マスター王我と戦うのですか？）

（ああ・・・もう少し強くなったらな・・・）

「蒼馬君、失礼するで」

「失礼するなら帰れ」

「しっ・・・危ないわ、真似するなんて・・・」

やってみた・・・

いつも花蓮がやってること・・・

「蒼馬、ここに来たと言うことは・・・」

「分からないから寝る・・・」

蒼馬は花蓮を無視して眠ってしまった

「ふふ・・・可愛いな」

何故か起きたら花蓮が膝枕していた・・・
その後有紗とフェルガと理由を尋問されていたのだった・・・

第十八話 騎士の戦い（後書き）

蒼馬「終わり方・・・なんか微妙」

作者「・・・すいません」

蒼馬「なんかチート戦士になつたな・・・俺」

作者「武技創造なんて・・・強いねw」

蒼馬「まあ強いからいいさ」

作者「だねーそれでは・・・」

作者「皆様からの評価・感想など待ってますm - - m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくですm - - m」

第十九話 破壊者の巣（前書き）

いつも通り修行をしていた蒼馬

武技創造能力にも慣れてきたところ

空間破壊者の拠点らしき場所が発見されたので
任務で向かうことになった・・・

第十九話 破壊者の巢

空間破壊者の拠点潰しの任務
俺と有紗とエコーズのメンバー

「けっこうな数居ると思うけどな・・・」

「大丈夫だよ～～きつと」

「うむ・・・見えたぞ・・・あれだな」

山奥に城っぽいがある

これが空間破壊者達の拠点の一つ

「城ごと潰すか・・・」

「他の拠点の手がかり見つけたらだよ」

「私は侵入しよう・・・外は任せた」

エコーズが城に侵入

俺と有紗が城外を探索・・・

「いきなり戦闘な予感が・・・」

「侵入者発見！」

「にや！？見つかったよ」

蒼馬の勘は見事に当たり見つかってしまった

「報告される前に叩く！蒼馬飛燕！」

「ランドシュート！」

城に聞こえないように音を立てずになんとか

倒すのに成功した二人・・・だが

「管理局か・・・」

（こいつ・・・さっきの奴らとは纏う空気が・・・）

（・・・幹部でしょうか？）

（たぶん・・・）

黒いタキシードっぽい服に
杖を持っている男・・・

「潰しますか・・・土龍突進！」

「龍か！？なら・・・蒼龍天王斬！」

魔力の龍のぶつかり合い
しかし・・・2：1・・・有利だな・・・

「エクシードバスター！」

「紅風車↘天魔！」

「土壁城壁！」

相手の土の壁に防がれる
相手の属性は土か・・・

「なら・・・武器創造・・・甲縛式O、S、黒雛・・・」

術者の身を守りながら戦う鎧のような武装
ハオが使用する甲縛式O、Sだ・・・炎属性
この世では魔力を消費か・・・使いやすいな・・・

「なんだそれは・・・刀使いだと聞いているが・・・」
「さあゝな・・・鬼火！」

黒雛の背中にある二本の蠟燭から出される超密度の炎弾

「くっ！土壁城壁！」

「その程度では鬼火は止められない！」

ドゴーーーーン！！！！

「くっ・・・なんという破壊力だ・・・」

「エクシードバスター！！！」

「くそ！土壁城壁！！！」

（召喚魔法の前に倒すか・・・）
（召喚前にですか・・・どうするんですか？）

威力があるからな・・・結界でいける技
・・・あれをやるか

アンリミテッドブレイド・ワークス
「無限の剣製・・・」

錬鉄の固有結界。目視した武器・刀剣を結界内に登録しし複製、
貯蔵する。

結界内に登録した剣や、目指した武具を複製出来る 英霊アーチ
ヤーが使用していた技

「こ・・・ここは・・・結界か！？」

「武器創造・・・行け！！！」

大量の刀や剣・槍などの武器が相手に向かって飛んでいく
とてつもない数だ・・・

「くっ！土城守備陣！！」

「防いだか・・・だが！」

普通に当てるだけでダメなら！

爆発もだ！！

「壊れた幻想！！」
ブロックン・ファンタズム

「また同じことを！！土城守備陣！！」

ドゴオーン！！！！

飛んでいく宝具達は爆発を起こし
敵の守備魔法をも破壊し・・・

「グハアア！！・・・くそ・・・」

「凄いや・・・私の出番無かった・・・」

「やれやれだな・・・」

（マスター敵の反応です！多いです！）

（思いっきりやりすぎたか・・・）

今の戦闘で敵さん達が気づいたらしく
30人ほどの破壊者が向かってきた・・・

「そ、蒼馬君どうするの！？」

「倒すだろ・・・やるか・・・」

この数相手か・・・皆雑魚ならうれしいけどな
30人・・・やるか・・・

「有紗一発凄いのやってくれ！砲撃だ！」

「え？当たらないよ・・・わかったよ」

あの数に当てるには敵の動きを封じるか・・・
やるか・・・

「軍相八寸退くに能わず・青き門　白き門　黒き門　赤き門・相贖
いて大海に沈む！」

「四獸塞門」
しじゅうさいもん

相手の前方に“竜尾の城門”、左に“虎咬の城門”、右に“亀鎧
の城門”、上に“鳳翼の城門”という四種類の壁を発生させ、その
壁で作られた直方体の結界で相手を閉じ込める鬼道。かなりの強度
を誇る。

「・・・なんだこれは！？」「・・・」

（いい反応してますね）

（まあ当たり前だろうな・・・後は・・・）

相手の動きは封じた・・・後は

有紗の砲撃がどれくらい威力を出してくれるかだ・・・

「グランド・オブ・ザ・バスター！！！！！！」

とんでもなく大きい砲撃魔法

四獸塞門の中にいる破壊者はたぶん全滅だろうなと思わせる一撃

「有紗・・・すごいな・・・」

「活躍するもん！たまぁ〜には」

空で凄い煙が巻き起こっている・・・
しかし・・・一人の影が見える・・・

「全員雑魚では無いみたいだな・・・有紗は休め」
「え！？・・・うん・・・」

あの砲撃を耐えるほどの実力・・・
幹部ってやつだな・・・

「君が・・・次元の使いか・・・今の一撃は凄かったな」
「体力は・・・もう無いかな？」

「ふっ・・・貴様を倒す力は・・・あるな」
「・・・お前じゃ倒せないよ・・・たぶんな」

今の砲撃を耐えて俺を倒す力があるか・・・
やっぱり幹部ってやつだな・・・

「我が魔術の奥義だ！・・・グラビティダーク！！」
「魔術か・・・ならば・・・」

凄い大きな重力玉・・・
魔術ならば・・・打ち消せるかな・・・

イマジンブレイカー
「幻想殺し・・・」

シュパアーン・・・

蒼馬の右手に当たったグラビティダークは消えた・・・
打ち消されたのだ・・・

「な！？何故だ！？」

「終わりだ・・・蒼龍天王斬！！」

「くそ！！！！グハアアアア！！！！」

幹部に技は直撃し・・・落下していった・・・

「蒼馬情報は手に入れた・・・拠点をとすぞ！！」

「エコーズか・・・分かった落とすか・・・」

「でも・・・こんな大きな城破壊するには魔力使うよ」

二人共魔力を消費してる感じで無理そうだ・・・
俺も頑張つて・・・やるか

ゲート・オフ・バビロン

「王の財宝・・・出て来い乖離剣エア」

「蒼馬君無理だダメだよ！何するか知らないけど・・・」

「まあ大丈夫だ・・・」

そう言つて三人で城の真上に移動して・・・

エヌマ

・エリシユ

「天地乖離す開闢の星！！！！」

空間切断。風の断層は擬似的な時空断層までも生み出す
ギルガメッシュの使用した究極の一撃だ・・・

ドゴォー！！！！！！

「なっ!?!?・・・嘘だ・・・」

「蒼馬君・・・城が・・・無いよ」

二人は啞然としていた・・・目の前にあった城が
消えている現実・・・

「任務終了・・・帰るか・・・」

こうして任務は終了し

二人に今日の技のことを説明しながら局へ戻って行ったのだった・

・

第十九話 破壊者の巣（後書き）

作者「強すぎる・・・チートだ・・・」

蒼馬「確かにやりすぎだ・・・」

作者「まあいいやゝかつこいいからw」

蒼馬「戦闘ばつかで疲れた・・・」

作者「休まないとねゝお疲れ様」

蒼馬「紅桜蒼天流が・・・薄くなっていくような・・・」

作者「気にしない！それでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm - - m」

作者「次回もよろしくですm - - m」

第二十話 王我の右腕（前書き）

破壊者の拠点を破壊し

局へ戻った蒼馬達 王我の居場所もつかみ
その場所へ向かうのだった・・・

第二十話 王我の右腕

前回の拠点破壊作戦でエコーズが王我の居場所の情報をつかんだ
王我は山奥にあった城から近い場所に身を隠していた
蒼馬一人で決戦したいと言う蒼馬・・・
王我との一騎打ちのため 王我の隠れ家へと向かう

「ここらへんだな・・・」

（マスター 魔力反応あります！）

（王我の反応は！？）

（ここからでは分かりません・・・）

反応が分からないので蒼馬はボロボロの城の中に
進入していった・・・

「ボロボロだな・・・」

「ボロボロとは失礼だな・・・」

「なっ！？」

入り口の扉は閉まり扉のほうから声がする
城の中は真つ暗確認は難しい・・・

「残念だが・・・王我様では無いよ・・・」

「王我はどこだ？・・・」

「ここで死ぬ君に言っ たつて意味無いだろ」

相手が言つと城の中は明るくなり
人が確認出来る明るさになった・・・

「死ぬのは・・・貴様だ!!」

「ふっ・・・戯言を言うな!!」

敵の武器は槍?・・・薙刀のような感じ

蒼馬と1:1で挑む覚悟と実力があるようだ・・・

「紅風車↪天魔!」

「デモンランス!!」

お互いの技は激しくぶつかり合い相殺
相手が仕掛けてくる

「デモンスピア!」

「・・・虚閃」

ドゴーーーーーン!!

蒼馬の指から放たれた破壊の閃光
蒼馬知るアニメの好きな技だ・・・

ゼロ・オスキュラス
「黒虚閃」

「くっ!?!」

黒い虚閃さきほどより威力もある技
相手は連続攻撃に反応しきれず直撃した

「やるな・・・クリムゾンダーク!!」
アウアロン

「全て遠き理想郷!」

あらゆる攻撃・交信から対象者を守るこの世最強の守り。それは魔法の領域であり、防御というより「遮断」であるという。

「なっ！？防がれただと！？」

「余裕な表情だな・・・蒼龍天王斬！！」

「くっ！？デーモンスピア！」

隙は見せたが反応してくる敵

蒼龍天王斬は相殺されたのだ・・・

「スピリット・オブ・ソードウイッチ白鴿！！！」

甲縛式O・S白鴿のモデルは葉が昔から心惹かれていた白鳥。

「巨大な剣だな・・・デスランス！」

「はあゝ！」

右手が伸びて剣を地面に刺し体を浮かせ回避した

「なっ！？そんなことも？」

むむみょうやくむ

「無無明亦無！！」

「なっ！？グウハア！」

フシユーツー

「まだだ・・・武神魚翅」

雷の力を持つ甲縛式O・S

「とどめだ・・・雷法・・・」

相手の頭上から落雷

さすがに反応出来ず直撃・・・

「くっ・・・強いな・・・」

「お前に負けるほど弱くない・・・」

蒼馬は勝利したが・・・敵の足元の魔法陣が出現
・・・召喚魔法！？

「来い・・・デーモンキマイラ」

奴の姿は羽があり尻尾もあり・・・虎のような顔の
魔獣に変身したのだ・・・

「醜い姿になつたな・・・」

「黙れ！！！！ウオオオオ！！」

「全て遠き理想郷・・・」
アウアロン

また攻撃を防ぐ・・・そして

「まだ防ぐか！防ぐばかりでは・・・」

「約束された勝利の剣！！」
カリバー

「なにいい！？」

約束された勝利の剣で切り裂かれた敵
さすがに耐えることは出来ず・・・死んだ

「王我の反応はここには無いか・・・」

（マスター局から戻れとメールが・・・）

（戻るか・・・）

こうして戦闘三昧の蒼馬の一日は終了し
局に戻った蒼馬だった。。。

第二十話 王我の右腕（後書き）

蒼馬「戦闘ばかり・・・」

作者「それ以外思い浮かばない・・・」

蒼馬「悲しい脳だな・・・」

作者「TOT」

蒼馬「まあ頑張れ・・・」

作者「・・・（コクコク）」

蒼馬「次回から王我との決戦だったか？」

作者「・・・（コクコク）」

蒼馬「まあ頑張れ・・・」

作者「あい・・・それでは」

作者「皆様からの評価・感想など待ってますm・・・m」

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8647l/>

紅と蒼色の幻想 ～時空を越えた戦い～

2010年10月20日08時13分発行